
タイフーンマンズ～ジャスティスリーグへの道筋(みち)～

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイフーンマンズ〜ジャスティスリーグへの道筋^{みち}〜

【Nコード】

N2399I

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

台風十三号が、もたらした五人の少年にヒーローの証を、そして今宵台風が、ヒーローとなる。season4開始

ブローグ

ニューヒーロー誕生（前書き）

台風がもたらした奇跡。感想をよろしくお願いします。

ブローグ ニューヒーロー誕生

時は、2012年八月九日水曜日、日本。

相変わらず、犯罪者どもが、うごめくこの世界に

台風十三号が来た。

ある廃工場で、三人の少年が暴力団に捕まっていた。

なぜ、捕まったか不明である。

「貴様等、俺たちにぶつかってきて、容赦あると思うなよ、あっー」

怒鳴りの声がやかましく聞こえる。

少年の一人は台風十三号が上陸しているというのにと考えた時、

竜巻の音が聞こえる。

狂気に満たされた、竜巻の音が迫ってくる。

そして、次の瞬間、竜巻が廃工場に直撃した。

台風十三号は衰退をしていた。

中心気圧 996 hPa

最大風速 20 m

進行方向 北東

速度 65 ?

だった。

暴力団の部下たちは全員命を散らされていた。中には、廃工場の破片が心臓辺りを突き刺さっている死体もあった。

少年たちも、死んでいたのだが……

とある研究所で眠らされていた。少年三人組。

暴力団の正体は、キギヤミ組。

暴力団の一番上の存在首領があることを言い始めた。

「台風は獰猛な生物だ、部下を殺す位なら、なぜ、少年ら三人のクソどもを助けるんだ。」

幹部の一人が話した。

「もしかすると、台風に心があるんじゃないですかね。」

「そうだとすると、まずいのでは旦那。」

「おい、若頭、研究所にいる三人の少年を今すぐに殺しに逝って来い。」

「承知しました。親びん。」

研究所

ある二人の研究者が、三人の少年を見ていた。

「台風は、危険なはずなのに、三人の少年を救うなんてあり得な
のでは？」

「台風には善悪があり、三人の少年を救いたいという気持ちがあったのではないかなと思うんですよ。」

「そのせいで、俺は、その少年等を、殺すことにしたのさ。」

「貴様は、何者だ。」

「理彦です。」

「早速ですが、この三人の少年には消えてもらいます。」

「やめろ」

理彦は、三本のナイフを投げた。

しかし、投げた三本のナイフは、雲みたいな物で止められていた。

三人の少年は、気がついた。

実は、竜巻が襲った時、三人の少年は、一度、命を落とした。しかし、台風が自分の命を削って、三人の少年に、分け与えた。

そのため、最大風速が41メートルだった台風が、一気呵成に18メートルに衰えたのである。

三人の少年は、目覚めた。

新たな力を手に入れた。

「早速、あそこにいる、暴力団幹部の一人、理彦を懲らしめよう。」

「暴風アップー」

「雨で、身動きをとれなくしてヤンよ。」

「波よ、風と雨を協力しろ。」

理彦は、彼等の攻撃を受けて、悶絶した。

さて、次はキギヤミ組を、懲らしめに行った。

「あいつ、何グスグスしているんだ。」

「旦那、何かが、こっちに来やすぜ。」

「悪いけど、理彦のことなら、悶絶させてやったから。」

「ワニ公、三人を殺れ。」

「波よ、全てを鰐に、ぶつけたまえ嫌という程に」

ワニは、波の力で吹き飛ばされた。

トラックで轢き殺そうとした、首領だったが。

「何っ、片手で、持ち上げただと、台風の方がこれが。」

持ち上げている少年がにやりをした。

台風の中で、トラックの荷物を積む場所を破壊した。そして

「こんなに、ブツを持っているのか。悪いが、雨、そいつ、トラックから話してクンねえーかな。」

「了解だぜ、風」

首領をトラックから話した後、風は、トラックを右側に投げつけた。

トラックは派手に爆発した。

その時、キギヤミ組のアジトが展開図のように、倒れた。

「皮肉だなあ、これでは、警察にばれるよ。」

「くそつ。」

そして、警察が来た。

「君たちがキギヤミ組をやっつけたんだ。凄いねー。」

「僕たちは、やるべきことをやっただけです。」

「君たちの名前は何？」

質問をされたが速攻で返した。

「風です。雨です。波です。」

「チーム名、Typhoon m a n s です。」

翌日

マスコミが気にしていたのは

「刑事さん、あの少年三人は一体なんですか？」

「彼等は、異色で全く新しい正義の味方となってくれました。」

「彼らの名前は？」

「チーム名、Typhoon mans ということです。」

海外にも、ニュースとなった。それを聞いていた。

ブルース・ウェイン通称バットマンは

「今宵、台風がヒーローになったというのか。面白そうだ。」

スーパーマンも同じ気持ちだった。

「彼等を是非、案内する日が来るかもな。」

風、波、雨其の三人の台風ヒーローが今誕生した。

ブローグ

ニューヒーロー誕生（後書き）

台風って本当にいいやつなのかという問いかけみたいな感じに仕上がりました。
感想をよろしくね。

第一話

複雑〜借金取は悪魔の猛獣〜（前書き）

typhoon mansのエピソードは、ここから熱くなります。
感想よろしく

第一話

複雑く借金取は悪魔の猛獣く

ある一人の者が、借金をしていないのに、しているとされていた。

そして、厄介な借金取が、その者の、魂を貪りそして、金も盗って逃げた。

t y p h o o n m a n s はそのことを知った。

「なあ、風？」

「どうしたんだ、雨。」

「波は知らないか？」

「あんなところで、闘っているよ。」

「波の権よ、誠めて怪物を倒せ。」

借金取りの正体は、アマゾセストという名前の者で、しかも狼の様な爪や牙をもっている。

攻撃を受ける直前、雲になり、避けた。

「暴風アップーでもお見舞いだー。」

「ぐわあー」

「雨を降らすと見せかけて、雹を降らすぜ。」

痛がっているアマゾセスド。

「今だ、波。」

「波の鼓動よ、あの怪物に罪の津波で気絶させたまえ。」

波の攻撃は命中した。

アマゾセストは警察につかまり、一件落着のようと思った。

彼は謎の犯罪組織　古　という組織は16名で構成されている。

アマゾセストは、その仲間の一人である。

そして新たに動こうとする影があった。

「面白いことになってくるぞ。」

何が起ころうとしているのか

第一話

複雑〜借金取は悪魔の猛獣〜（後書き）

次回 無効〜高気圧並みに倒せない敵〜です。
感想お願いします。

第二話 高敵、高気圧の様に倒せない敵、（前書き）

最凶の敵、高気圧が、Typhoon mansに襲いかかる。感想よろしくお願いします。

第二話 高敵、高気圧の様に倒せない敵、

typhoon mansは、警視庁から、名誉に印をもらえるぐらいに、正義力を向上していた。

しかし、悪は、闇から生まれ憎しみや力への怒りにより、Typhoon mansに負けるに劣らない者が増えようとしていた。

古という、犯罪組織が存在しているせいか、何か、怪しげな空気に包まれていた。

首領部隊が16名

幹部部隊が52名

部下部隊が250名

ほどうる。

脱退するものは、いない。

するとしても、古の恥になるだけ。

高気圧の能力を持つ、部下部隊の一人、ブーセがいた。

もう一人は、口が臭くてたまらない、幹部部隊の一人、ホシフトウがいた。

彼等は、二人一組で行動し、宝石店にこっそり忍び込み盗みを働く危険なコンビである。

「御前等、ここで何をしている。」

警察が来た。

だが

「ホシフトウここは、俺に任せろ。」

「わかったぜブーゼ。」

「俺の高気圧パワーを見せてやるよ。どりゃー」

「うわぁ」

「巡查、ここはTyphoon mansに頼んだらどうでしよう。」

「

typhoon mansが来た。

「悪さを働いているのは、何処の誰だ。」

「ばかばかしいこと言ってる場合か雨、ほら見てよ、古の奴だしかも二人もだ。」

ホシフトウは、逃げた。

ブーセは、高気圧パワーをtyphoon mansに浴びせた。

台風の弱点である、高気圧、まともに食らうと大ダメージは出る。

苦戦は、勿論強いられた。

「くそ、波よ、高気圧の力をうち砕け。」

「そんな大波、切っちゃいましたが何か？」

風は、水蒸気の力を吸収し、大突風を巻き起こした。

ブーセは、飛んで行った。

「よっしゃ、また悪者を懲らしめたぜってあれ？」

ブーセは高気圧パワーの暴走が原因で化け物となってしまった。

「貴様等は、簡単には殺らん。楽しんで殺す。」

「ドゴーン」

雷がはしった。

typhoonmanサンダーとtyphoonマンだ。

三人のヒーローは、これで五人になった。

欠点なしの台風ヒーロー結成だ。

「五人になったところで何になる。」

「ヒーローは、新時代を追い求めた結果がこれだ。ドゴーン」

t o b e n e x t c h a r g e a l l T y p h o o n
m a n s

第二話 高敵く高気圧の様に倒せない敵く（後書き）

次回は、強敵く粗ぶる高気圧くです。お楽しみに
感想よろしくね。

第三話 強敵く粗ぶる高気圧く（前書き）

タイフーンマンズの闘いに注目してください。感想よろしくね
へっ

第三話 強敵く粗ぶる高気圧く

闘いは、終盤を迎えようとしていた。

typhoon man'sの熱き戦いは、高気圧のシステム装置を壊した。

「くそ、なんで壊れるんだよ」

「俺たちの攻撃に逆らえなかっただよ。」

雨と雷のパンチが、彼を失神させた。

終わったと思いきや、まだいる敵。

あの口臭を武器にしている相手だ。

しかし、タイフーンの力が、口臭を負かして舞うため俊足的には闘いは、終わった。

犯罪組織 古のアジト
いにしえ

「この古の基地あじとで、なぜ多く者が逮捕されるようになった原因を判る者はいるか？」

「台風ヒーローの野郎です。」

「俺が、水蒸気を金に換えてやりましょう。」

「頼むぞ、マネーウォーター」

マネーウォーターは、水蒸気を金に換える能力の持ち主。

台風にとっては、更なる強敵だ。

バットマンは、警戒をしている、古という名の犯罪組織を追いかけていた。

「よっ、バットマンそこで何をしている。」

「古の者か、お前？」

「大正解だぜバットマン、言っとくが俺の名はマネーウォーター、名の通り、水なら何でもお金に変えられるのさ。」

ペッドボトルに入った、水を金に換えて、バットマンにぶつけた。

「そのコインは、ちょっと頑丈でね、頭に当たると悶絶しっちまうぜ。」

バットマンの頭に、お金が、当たった。

悶絶してしまった、バットマン。

マネーウォーターと古が少しずつ明らかになる。

t
y
p
h
o
o
n

m
a
n
s
達の戦いは続く。

第三話 強敵く粗ぶる高気圧く（後書き）

次回は、米古く来日したヒーローく
お楽しみに、感想お願いします。

第四話

米古く来日したヒーローく（前書き）

台風は、ついに古のアジトを見つけられるのか？

第四話

米古く来日したヒーロー

日本のある秘密場所、そこにTyphoon man'sの基地がある。

コンピューターは、古の犯罪集団をいくつも確認しているところがあるところを推測した。

「アメリカに古のアジトがある。」

「しかも動き方が、変だ。」

アメリカでも古による犯罪行為が絶え間なく続いた。

タイフーンマンズ達の出動に違いはなかった。

新時代のヒーローは、アメリカに向けて出発をした。

タイフーンマンズは、あることに気づいた。

硬貨が飛んできたのであった。

「あいつ、そこらじゅうの水蒸気をお金に換えていたのか。」

「タイフーンマンズの二番目に最悪な敵襲来だな。」

「波よ、あのお金やろくに、体罰を与えよ。」

しかし、波ですら、お金に換えた。

雷は、いいこと思いついた。

「できたばかりの水蒸気は、海の味がするから、ドゴーン」

塩水に電気を通すと、流れやすいことは、みんなも知っているだろう。

塩を含んでいる水蒸気なら電気が通りやすいという科学的な方法。

「ぐわあーしびれた。ちっ、逃げるしかないな。」

風が、行く手を遮った。

「君、俺の暴風アッパーでも喰らっておねんねしなっ。」

「チームワークは、最強クラスだね。」

タイフーンマンズ達は、まだ知らない。

古のアジトには、バットマン、グリーンアロー、アクアマンが、拉致されていることに。

しかも能力不明のボスに。

「頼むぞ、タイフーンマンズ、君たちを歴代ヒーロー達が見守っているからな。」

古のアジトには、三人の歴代ヒーローが勝てないほどの敵がいる。

タイフーンマンズの勝利を信じよう。

第四話

米古く来日したヒーローく（後書き）

次回は緑指くグリーンランタンとの強力タッグくです。お楽しみに
というよりこの小説以外と歴代ヒーロー出すぎだろ。ノリツツコミ
です。

第五話 緑指くグリーンランタンとの強力タッグく（前書き）

歴代ヒーローがついに協力。

第五話 緑指くグリーンランタンとの強力タッグく

タイフーンマンズは、アメリカに来日してから早くも3日が経った。

宝石泥棒を捕まえるためにタイフーンマンズの戦い方が問われていた。

「風」

「分かってる。作戦ナンバー〇参参参で行けばいいんだろ」

「ドゥーン」

雷の攻撃が、宝石泥棒の乗った車のタイヤの一つをパンクさせた。

「くそ、しまった」

宝石泥棒の三人組が出てきた。

「親分になんて言ったらいいか、わからねえだろうが」

タイフーンマンズはあるフォーメーションで、宝石を守った。

「暴風アッパー」

宝石泥棒三人組は、雲によって拘束されていた。

その後、警察がやってきた。

しかし、アメリカの警官たちは、新時代のヒーローを知る由もなか

った。

グリーンランタンは、宝石泥棒が親分と言っていた者に拘束されていた。

「古の一人だろお前は。」

「そうさ、俺その古の一人、パラッソだ。お前と同じグリーンランタンの一人でもある。」

タイフーンマンズは、ある建物で緑色に輝く光を見つけた。

「あれって？」

「グリーンランタンの光だ。」

もしかしたらと思った、タイフーンマンズ達は、建物の壁を雲で破壊した。

「何者だ、お前等は」

「タイフーンマンズという新時代のヒーローを知らないとは生意気なものだな。」

「波よ、相手の行動を封せ」

水がないところから水が出た。

雨は、手に持っている雲を氷ナイフにして、グリーンランタンを拘束している縄を切り裂いた。

「助かったよ。タイフーンマンズ」

「ヒーロー同士だ。類を助けるのもヒーローの役目^{ミッション}」

これで協力で強力なタッグができる。

「小癩共がー」

「台風陣坤瀨」

グリーンランタンの指輪のパワーが加わり、相手を気絶させた。

「タイフーンマンズ、いやな知らせだが聞いてくれ。」

「なんだその、嫌な知らせというのは」

「バットマンやアクアマンさらにグリーンアローまでもが拘束されている。」

「なんだって」

「古の奴、リーダーを超極悪非道の者にしていて、全く歯が立たないんだ。」

「俺たちにそいつを倒せって言っのか。」

「いや、そうではない君たちには、少しずつジャステスリーグに入る価値が出てきたということだ。」

グリーンランタンはその場を後にした。

「ジャステスリーグか。いろんなヒーローたちが集まると呼ばれている場所だ。」

「まだまだ、俺たちは、ヒーローとしての価値観をあげなければな。」

第五話 緑指くグリーンランタンとの強力タッグく（後書き）

次回 蟲牧く虫の力で大苦戦くです。お楽しみに

第六話 蟲牧く虫の力に大苦戦く（前書き）

蜂とバッタと蝶々が合体した敵が現れてタイフーンマンズは苦しめられた。

第六話 蟲牧く虫の力に大苦戦く

「虫が来たぞー」

「俺の名は、コンセクト・レームゲだ」

「タイフーンマンズの力を借りるしかない」

タイフーンマンズが、出動した。

「暴風で虫どもを混乱させるぜー」

しかし虫たちの行動は、ややこしかった。

「くそっ」

「波よ、虫を溺れさせろ」

タイフーンマンズは、倒しづらい相手と戦っていた。

其れに勘付いたのは、スーパーマンである。

「建物を雲で覆い隠して護れ。」

雲はダイヤモンド並みに硬い。しかし何らかの力が入れば壊れてしまふ。

「虫使い魔は、これを破壊したら長期戦になるかもな。」

「長期戦か、それはいいことだな。」

虫達は、雲を破壊した。

「馬鹿力か、この害虫は。」

戦いが行き詰った。

n e x t e p i s o d e t y p h o o n m a n s

第六話 蟲牧く虫の力に大苦戦く（後書き）

次回は 殺虫く雲の力で窒息死くです。お楽しみに

第七話

殺虫く雲の力で窒息死作戦く（前書き）

タイフーンマンズの戦いは、ヒートアップしていく中、もう一人のヒーローは大変な事に・・・

第七話

殺虫く雲の力で窒息死作戦く

「雲の壁は、破壊されるし、雲で作った武器は、壊されるし、絶望に近いよ。」

「さつさと降伏しな、馬鹿なヒーロー達よ。」

「波よ、虫をあるところへ流せ」

排水溝に虫達を流した。

「確か、雲は、水蒸気の塊だよな、硬度も簡単に変えられる。となれば、虫がやってきた。」

そして、無数の虫を雲の中に閉じ込めた。

「よしっ、これでいける。」

そして雲を消した後、虫が窒息死していた。

「何、そんなことが」

「簡単だ、雲ってというのは硬度がダイヤモンド並みの状態で、虫を閉じ込めた場合、当然、水蒸気も硬度を増し、そして、虫はその水蒸気の中に入り息ができなくなり窒息死するということだ。」

「雨で頭を冷やしなキモい虫が。」

「波よ、虫の足をすくってしまえ。」

「どわあー」

「突風セレクト大磨拳」

「ぎゃー」

虫のボスは、倒された。

しかし、戦いは終わりではなかった。

スーパーマンが倒されたっという声。

そして謎の身体を持つ古のリーダー

手に持っているのは、クリプトナイトだ。

タイフーンマンズは、はたして、グリーンランタンのように、スーパーマン達を救うことができるのか？

t o b e c o n t i n u e

第七話

殺虫く雲の力で窒息死作戦く（後書き）

次回は、展寸く古のアジトを探れくです。お楽しみに

第八話 展すゝ古のアジトを探れゝ（前書き）

今回は戦いに関するもの、一切なしです。

第八話 展寸く古のアジトを探れく

スーパーマンの探索に、手間がかかっていた。

「おいつ、風。」

「何、雨。」

「グリーンランタンにも、協力を要請しないのか？」

「黙って探せ、古の部下に見つかる前に探し出すんだ。」

波と雷に怒られた。

タイフーンマンは、何かを発見した。

「クリプナイト、スーパーマンの弱点じゃないか。」

タイフーンマンズには効かない。

クリプトナイトが、古のアジトまで続いていた。

タイフーンマンズは、古のアジトの近くに来た。

スーパーマンが、拘束されていた。

「これより、我が古によるヒーロー達の処刑を始める。」

風が、疑問に思った。

「これは、吉兆と思ったが・・・」

「ばれてしまった。」

「波よ、正義者達を救え。」

「させるかー！」

「暴風アップー！」

「ぐわあ。」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

第八話 展寸ゝ古のアジトを探れゝ（後書き）

次回は、創造ゝタイフーンマンズの信じられない力ゝです。お楽しみに

season2の予定日を延期しました。少々スランプになっていたのでこれからは、急いで考えたいと思っています。

第九話 創造くタイフーンマンズの信じられない力く（前書き）

Season 1で一番短いです。

第九話 創造くタイフーンマンズの信じられない力く

「風、行くぜー」

「ああ、任しとけ。」

風と雷は、雲をロープにした。

古のアジトには大勢の敵がいたが、次々と撃破していった。

「波よ、後ろから一気に攻めなさい。」

古の最大の敵が現れようとしていた。

「雨に濡れて頭を冷やせ。」

大ボスが現れてしまった。

「我の名は、マーリタズだ。これより、正義者達を抹殺する装置を、働かせた1200時間以内に装置を壊さないと、この地球から正義者は死を迎える。」

タイフーンマンズは全員聞いていた。

「風と雨と私で、リーダーを攻撃する。あとの雷と波とグリーンラントンで、こいつ等を頼む。」

「よし、分かった。」

「行くぞ。」

1159時間54分20秒

タイフーンマンズは間に合うのか？

次回に続く

第九話 創造くタイフーンマンズの信じられない力く（後書き）

クライマックスが近づいてきました。

次回は 終外く暴走と狂気くです。お楽しみに

第十話 終外へ暴走と狂気へ（前書き）

プロローグから数えれば今回は、11話目です。

第十話 終外へ暴走と狂気へ

ヒーロー抹殺完了まで

1158時間20分3秒。 実際は35分55秒

「タイフーンマン、もしかしたらリーダーの野郎、動きが早いんじゃないのか？」

「いやっ、いたぞ。」

「来たな、タイフーンマンズ」

古のリーダーは、一気に煙幕を張った。

「風、頼むぞ。」

「暴風リユクネクト」

煙幕を暴風で掃った。

「序の口程度だぞ。」

「へえーそうかい、台風はヒーロー化すれば煙幕なんて恐くないのさ。」

台風の力は、謎だらけだが、相当強いものである。

ヒーロー抹殺完了まで

実際29分56秒

「タイフーンマンズが、もう少しヒーローがいてくれたらと言っている。」

ジョン・ジョーンという火星から来たヒーロー。心を読んだり透明になったりと多彩な能力の持ち主だ。

「新時代のヒーローも御困りっつか、助けに行くとしますか。」

ホークマンとフラッシュもジャステスリーグの一員である。

もちろん、ジョンもジャステスリーグの一人だ。

ヒーロー抹殺完了まで

27分30秒

「数が、多すぎるしよく見るとロボットまでいやる。」

「助立ちするぜ。うぉーー」

ホークマンとフラッシュだ。

「グリーンランタン、呼んだのか？」

「事前に、緊急の時は来てくれと頼んだんだ。」

雨と風とタイフーンマンのところには、ジョン・ジョーンが来た。

「君たちの心読んでよかった。」

「相手の攻撃力を知る方がいいと思うんだが？」

古のリーダーの容赦ない攻撃。

ヒーロー抹殺完了まで

2分14秒

「よし、このままアジトへ向かうぞ。」

そして、アジト内部にも大勢の犯罪者軍団がいた。

「よく考えてみたら、ここは、昔、刑務所だったらしいが古のアジトになったのはつい最近のことだ。」

雷の行っていることは当たっている。

これだけの犯罪者達がいることは古のアジトは元・刑務所である。

「できるだけ早く、ケリをつけないとな。」

ヒーロー抹殺完了まで

18分55秒

次回に続く

第十話 終外へ暴走と狂気へ（後書き）

次回は、減点へ急がれた処理へです。お楽しみに

第十一話 減点ゝ急がれた処理ゝ（前書き）

第1シーズンの中で最も長いお話になりそうです。

第十一話 減点ゝ急がれた処理ゝ

雷と波とフラッシュとホークマンは、古の副リーダーと抗戦になった。

「うちず、打たれずというのは、このことだな。」

タイフーンマンズと他のヒーローは、苦戦を強いられていた。

ヒーロー抹殺完了まで

15分59秒

古のリーダーに苦戦している、三人。

「まずいな、相手の弱点を探ったのだが・・・」

アジト内では、戦いが終わりを告げようとしていた。

副リーダーが気絶をしていた。

「スーパーマンたちを助けて、援護へ向かうぞ。」

「サ・・セ・・ナ・・イ」

ヒーロー抹殺装置の影が映っていた。

古のリーダーと激しい大戦を繰り広げているタイフーンマンズとジョン・ジョーン。

「助立ちするぜ」

「雷、戦いは終わったか？」

「仲間と一緒になら、其々の、能力で倒せる相手なんていないのさ。」

ホークマンとグリーンランタンは、古のリーダーの不意を突こうと考えた。

「馬鹿め、攻撃はこっちの方が勝るわ。」

「それはどうかな。」

バットマンのアップーが、古のリーダーに直撃した。

タイフーンマンズの攻撃で雲の中に古のリーダーを閉じ込めた。

そして、スーパーマンがボール状になった雲をたたき割り、古のリーダーを海に落とした。

アクアマンは、海にいる生き物の中から、古のリーダーと遊びたがっている。イルカを呼び出した。

その後、アップーで海から追い出した。

グリーンアローの矢が網になり、古のリーダーを捕縛した。

「古の副リーダーと、古のリーダーを捕まえた。残すは、ヒーロー抹殺装置を壊すのみ。」

その時である。

ヒーロー抹殺完了まで

10分00秒

となっていた。

「しかも、ヒーロー抹殺装置があんな大きさだとは。」

「壊すしかないだろう。」

ヒーロー抹殺装置から小型ロボットが1千億体も現れた。

「数が多いな。」

「暴風スリョウ」

小型ロボットの2千体を破壊した。

グリーンアローは矢型の手榴弾を発射した。

爆発音とともに5万の小型ロボットが現れた。

「ドゴーン」

「波よ、小型ロボットの動きを封じ握り潰せ。」

タイフーンマンズの雷と波の良い攻撃が小型ロボットを減らしていた。

グリーンランタンも負けてはいない。

指輪のパワーを少し上げて、ビームを刀に変えた。

小型ロボットが、まるで辻斬りにあっているかのように見える。

「久方振りに、こんなに暴れることができたぜ。」

スーパーマンも小型ロボットを潰しまくっていた。

「同感だな。」

小型ロボットは、海に潜った。

「おやおや、小型ロボット達、海に勝手に入るとは不法侵入だぞ。」

アクアマンは、鯨を呼び出し一緒に攻撃した。

グリーンランタンとスーパーマンとタイフーンマンズは、ヒーロー抹殺装置を破壊しようとした時、クリプトナイトとイエローストーンと水無石が光線上になって襲ってきた。

「タイフーンマンズの弱点も把握するとはな。」

「いい度胸だぜ。」

ヒーロー抹殺完了まで

4分39秒

「くそっ、小型ロボットに気を取られていたから、こんな時間に。」

「雲を、氷ナイフにした。受け取ってくれ。」

グリーンランタンが質問をした。

「こんなものどうしろっと言っただ？」

「ヒーロー抹殺装置にブツ刺すのみでいい。それでない、簡単に壊せない。」

ヒーロー抹殺完了まで

2分10秒

残された時間はあとわずか、はたして七人のヒーローは、ヒーロー抹殺装置を破壊することができるのだろうか。

第十一話 減点ゝ急がれた処理ゝ（後書き）

次回は、逝手ゝニュージエネレーションジャスティスリーグゝです。
お楽しみにとseason1の最終回です。ぜひ見てください。感想も宜しくお願い致します。

第十二話 逝手〜ニューヨークエネレーションジャスティスリーグ〜（前書き）

Season 1の最終回です。感想をお願いします。

第十二話 逝手〜ニュージェネレーションジャスティスリーグ〜

ヒーロー抹殺完了まで

1分23秒

タイフーンマンズは、氷ナイフで、水無石を破壊していた。

「雷、そろそろ行くぜー」

「攻撃態勢を、変えていきますか。」

「突風セントラル」

「雨の力を思い知れー」

ホークマンは、小型ロボットを壊滅させた。

ヒーロー抹殺完了まで

0分25秒

「時間がないぞ。」

「氷ナイフを投げるしかない。」

七人のヒーローは、氷ナイフをヒーロー抹殺装置にぶつけた。

そして

ヒーロー抹殺完了まで

0分01秒で止まって爆発した。

6時間後

「タイフーンマンズ、君達にはジャスティスリーグの証をあげよう。」

歓声がすごくて、タイフーンマンズは喜んでいた。

雨が皆に向かってこう言った。

「ありがとうございます。ジャスティスリーグに入れてとてもうれしいのですが、僕にはもう一つ考えていたことがあります。其れは、僕たちみたいな新時代のヒーローは世界中にいると思います。そこで僕達が創設しようと考えていたのがこれです。ニュージェネレーションジャスティスリーグです。」

スーパーマンは、感心していた。

「君達が、考えたことは私も賛成している、みんなもだよ。」

ジャスティスリーグ基地

「ニュージェネレーションジャスティスリーグか。いいと思うよ。」

「そうだな。」

喜びの中に潜む闇の存在。

「古を改めて、^{いましめ}誠にしよう。」

「そうするしか、ないだろ、元・インドのスーパーニューヒーロー？」

「そうかもな。」

season2に入る前に・・・

古から誠に変わった組織の内部のリーダー

グレヴァンカ・ケミスカリー・ロンロという者の能力はこちら

攻撃力 500兆これはタイフーンマンズの20倍に相当

防御力 85兆これはグリーンランタンの800倍に相当

作戦力 9500兆これはバットマンの1万倍に相当

素早さ 9999兆これはフラッシュの4万倍に相当

season2も宜しくね。

第十二話 逝手くニュージェネレーションジャスティスリーグく（後書き）

season2のプロローグは、戒神く誠の脅威くです。お楽しみに
感想と評価を宜しくお願いします。

season2 プロローグ 第一話 戒神く誠の脅威く（前書き）

新しいお話が始まりますよ。感想お願いします。

season2 プロローグ 第一話 戒神、誠の脅威

2012年10月11日 日本

怪しげな空気は消えてはいなかった。

「助けてー」

逃げている少女を追いかける不審者。

タイフーンマンズの一人、雷がやってきた。

「タイヤの部分を、パンクさせてしまえば動かなくなる筈。」

雷が放たれて、車のタイヤ全部がパンクした。

「くそっ、貴様。」

不審者が、手に持つ、ナイフを曲げた。

「ヒーローの恐さを身と心と程に知れ。」

不審者は、気絶していた。

謎のヒーローが、フランスとロシアとオーストラリアとリビアとキルギスの国にいた。

「何で、こんなにいるんだ。」

「詳しいことは、謎だがもしかしたらニュージェネレーションジャスティスリーグのメンバー候補がいろんな国にあることだろう。」

誠のアジト

「インドにいたニューヒーローは悪事を壊すだけでは何も始まらないぞ。」

「畜生。」

12月21日の破壊兵器の影が映っていた。

タイフーンマンズの新章は、怒涛の予感がしたぞ。

フランスにいるヒーローに向かっているのは、タイフーンマンズとバットマンとグリーンアローだ。

season2 プロローグ 第一話 戒神〜誠の脅威〜（後書き）

今回は、新展開〜コンセントとUSBを巧みに操る者〜です。next enjoy

第二話 新展開、USBとコンセントを多彩に操る者々（前書き）

Season 2 早々、激しいバトルです。

第二話 新展開くUSBとコンセントを多彩に操る者々

タイフーンマンズとバットマンとグリーンアローは、フランスにいる新人ヒーローに会いに行こうとしていた。

「雷、どうした。」

「ヒーローの生体反応確認した。」

雷が、持っている装置は、ヒーローをいち早く見つける装置である。

「あの辺りは、危険な場所だ。」

グリーンアローは、少しだけそのあたりを知っているようだ。

タイフーンマンズは、雲で全体を覆った。

「力ではなく、知識と力と知恵で戦う、タイフーンマンズには、向かうところ敵なしだな。」

ロボットが無数現れた。

風と波の融合攻撃がさく裂した。

「暴風ウェーブブレイクダウン」

ロボットの五割を破壊した。

バットマンは、疑問に感じていた。

「タイフーンマンズの唯一の弱点は、水無石という石以外にないのかと。」

タイフーンマンズにとっては、水無石は、厄介物である。

「雨が、冷たい雨を降らした。」

「天気予報では、今夜は、晴れって言うてなのに？」

「雨、住民だけは困らせないようにね。」

「分かってるって、風よ。」

「ぐああああああああ」

「苦しめ、フランスの新人ヒーローフスリヴィトよ。」

「其処までだ。」

「ちっ、タイフーンマンズか。」

「言っとくが、私たちを忘れていかな。」

敵は、バットマンの拳とグリーンアローの拳に殴られた。

「君が、フスリヴィットっていう名前のヒーロー？」

「そうだよ。タイフーンマンズの一人、波。」

「そういえば、金属は、熱の力で伸び縮みをするんだよな、よしっ、台風の熱発生 of 力を見せてやるぜ。」

風があることを言った。

「台風の、熱力には、温度を下げ上げが出来るらしい。」

フスリヴィトを縛っていた鎖は、金属疲労が原因で壊れた。

「助けてくれてありがとう。」

「ヒーローの類たぐいきずな同士だからな。」

敵の名前がわかったが逃げられた。

「ソビヴっという名前、こいつは、古にいた形跡もない。まだ新しいということか。」

ロボット軍団にいつの間にか、囲まれていた。

「i t ' s s h o w t i m e」

八人のヒーローの戦いの行く末は、いかに。

第二話 新展開〜USBとコンセントを多彩に操る者〜（後書き）

次回は、次義〜リビアのヒーロー登場〜です。お楽しみに

第三話 次義、今度はリビアのヒーロー（前書き）

リビアのヒーローがさっそく登場。そしてバットマンの永遠の敵が登場。

第三話 次義、今度はリビアのヒーロー

リビアで活躍する新世代のヒーロー、その名は

ハリードマン

彼は、身体を20万度まで熱くさせて、手から炎玉を出す能力を持っている。

リビアの宝石を盗んだ、ジョーカーを追いかけていた。

「へへへ、新時代のヒーローも大したことないなー。」

「それは、どうかな。」

ハリードマンは、火を放った。

しかし、瞬間冷却粉に無効されてしまった。

タイフーンマンズとフスリヴィトとバットマンがやってきた。

「げっ、厄介者が来ちゃった。」

ジョーカーは、追尾ミサイルを解き放った。

「風、追尾ミサイルを爆破してくれ。」

「了解、突風プロジェクション」

追尾ミサイル同士、ぶつかって、爆発した。

そして、ジョーカーは逃げようとしたが、USBケーブルに捕まった。

「逃がしてあげるなんて、一つも言っていないからな。」

フスリヴィットの腕は、すごかった。

その後、バットマンが持っている手錠でジョーカーを逮捕した。

「タイフーンマン、すまないが、ジョーカーをゴッサムシティの警察に引き渡してくれないか。」

「分かった。」

ハリードマンは、ニュージェネレーションジャスティスリーグの仲間に入る気満々であるためと大物犯罪者を捕まえた人数が6人とすごい。

彼の能力はどうやら2年前についたらしい。

ロシアにいるヒーローの行方は、まだ知らない。

「波と風と雨は、ジャスティスリーグの本部にいてくれ。」

雷が言った。

第三話 次義〜今度はリビアのヒーロー〜（後書き）

次回、雷瞋〜スーパーマンは何処へ？〜です。お楽しみに

第四話 雷隼とスーパーマンは何処？（前書き）

二話立て続けの展開です。スーパーマンが突然の行方不明に。

第四話 雷鳴くスーパーマンは何処？

タイフーンマンズは、ニュージェネレーションジャスティスリーグに加わったのは、フスリヴィトとハリードマンの二人。

ハリードマンは、ジャスティスリーグのメンバーの中に一人いないことを言った。

「スーパーマンは、いないということってそんなことはあり得るのか？」

「事実上、彼は一度もそんなことはない。」

グリーンランタンは、あることに気付いた。

キルギスにスーパーマンの身元を確認したらしい。

そして、この様子から、団体が確認された。

どうやら、誠とは別の組織らしい。

そして、キルギスにいるニューヒーローの生体反応を確認した。

タイフーンマンズとフラッシュとフスリヴィトとハリードマンとバットマンが出動した。

キルギスには、誠につながりがあるカキツキ炬という組織がいた。

しかし、最悪なことに、キルギスには炬と一緒に行動する姉妹組織が存在していた。

その名前は、淋デンサンという組織。

総合すると二千人ぐらいいることが分かった。

武装勢力の一部であつたらしく多彩な武器を持っている。

さらに、誠の組織から貰ったクリプトナイトを持っていた。

スーパーマンを保護するには難がある。

まず、誠とは違い、姉妹組織で多彩な武器を用いる。

タイフーンマンズとハリードマンとフラッシュはまず、キルギスのニューヒーローを探した。

フスリヴィトとバットマンは、炬と淋を追尾していた。

「ヒーローが、追尾なんてカッコ悪くないですかバットマン？」

「フスリヴィト、君の言うとおりだが、今はこれぐらいの方法しかない。」

フスリヴィトは、納得した。

ジャステイスリーグ基地内で、残ったメンバーは、とある作戦に出ようとしていた。

その作戦の名は、タイフーンマンズと同じ作戦で二手に分かれて二つの組織が股別れするような作戦を考えた。

つまり、タイフーンマンズが考えた作戦は採用されたのだ。

遂にジャスティスリーグとニュージェネレーションジャスティスリーグの一斉行動が始動した。

次回に続く！

第四話 雷瞋くスーパーマンは何処？（後書き）

次回は、超作戦く究極的決闘くです。お楽しみに

第五話 超作戦、究極的決闘（前書き）

スーパーマンを探しまくった後、炬と淋の組織が遂に明らかに

第五話 超作戦く究極的決闘く

タイフーンマンズとフラッシュとハリードマンは、ストックウイングというヒーローを探していた。

フスリヴィットとバットマンは、炬のアジトを木々に隠れた。

ストックウイングは、なんらかの牢屋に閉じ込められていたしかも、組織名は、淋が作った。

タイフーンマンズは、雲の力で、牢屋を破壊した。

ストックウイングは、ある事を言っていた。

「炬の組織のリーダーは、エイリアンである。淋の組織のリーダーは、ロボットだ。」

他のジャスティスリーグがやってきた。

フスリヴィットとバットマンは、タイフーンマンズ達と合流した。

ジャスティスリーグもやってきた。

スーパーマンは、炬のアジトにいた。

淋は、気が付いていた。

「相手は、ジャスティスリーグとニュージェネレーションジャスティスリーグの者だ。」

炬の基地に侵入してきたジャスティスリーグの一同。

スーパーマンを助けた。

「炬の奴等が来たぞ。」

「ストックウイング、死にさせろ。」

ストックウイングは、手が翼になり一気に攻撃を開始した。

タイフーンマンズの一人、風があることをやり始めた。

「右腕を冷却して、左腕を熱くさせて、其れをぶつけて一気に衝撃波にする。」

そして右腕と左腕をぶつけたとき、衝撃波が発生した。

炬の組織基地は、木っ端微塵に破壊した。

そして、そのリーダー格が逃げようとした時、ハリードマンは、灼熱パワーを利用してリーダー格が乗った機械を破壊した。

エイリアンは、バットマンが持つ手錠によって拘束された。

しかし、次のアジトである淋は、あるロボットがいた。

能力は、水無石とクリプトナイトを光線上に放つらしい。

そのため、フスリヴィトとグリーンアローを派遣した。

淋の基地に入り込み、戦闘が繰り広げられた。

そしてロボットと対決となった。

水無石とクリプトナイトを放ったが効かない。

そしてロボットの生命装置といえるケーブルを引きちぎった。

フスリヴィトとグリーンアローは、淋の基地を爆破する装置を多数設置した。

そして、爆破した。

「これで誠と関わる組織がまだあるかもしれませんが。」

「そうだな。」

しかし、誠の組織のリーダーは怒りもしない。

「シネズイ希をロシアに派遣させる。」

希という新たな組織が現れようとしていた。

第五話 超作戦〜究極的決闘〜（後書き）

次回、寒冷〜寒いところのニューヒーロー〜です。お楽しみに

第六話 寒く寒いところのニューヒーロー（前書き）

タイフーンマンズの戦いではなく、寒いところのニューヒーローの戦いです。

第六話 寒冷く寒いところのニューヒーロー

ロシア連邦に希という組織がいる。

彼のリーダーは、金属棒を多彩に操るエイリアンだった。

ロシアのニューヒーローがいた。

アイスハンドマンだ。

ロシアに来ていたタイフーンマンズ。

「風、例の奴で、ヒーローを見つけれるか。」

「分かったぜ。」

アイスハンドマンは、希の奴等を少しずつ潰していた。

希のリーダーは、アイスハンドマンを倒そうとしたが、凍りの力を受けた。

タイフーンマンズがやってきた。

アイスハンドマンは、タイフーンマンズを敵だと思い攻撃をしてきた。

「波、アイスハンドマンに説得して。」

しかし、凍らせた。

タイフーンマンズにとって、アイスハンドマンを説得するのに時間がかかった。

「くそ、こいつをどうにかしないと。」

次回に続く

第六話 寒冷〜寒いところのニューヒーロー〜（後書き）

次回は、善課〜説得は失敗を招かない〜です。宜しく

第七話 善課く説得は失敗を招かないく（前書き）

アイスハンドマンに悲しい過去が存在していた。

第七話 善課く説得は失敗を招かないく

ロシアで戦いは、続いていた。

「くそつ、氷漬け66回目だぜ。」

風は、怒ったように言った。

「風も相変わらず短気だな。」

雨がジョークに行っていると氷の壁に激突した。

「バーカ。」

雷は、アイスハンドマンの氷の壁を、雷で打ち砕いていた。

「戦いたくないんだ。」

「アイスハンドマン、悪いが悶絶してもらっぜ。」

そしてアイスハンドマンはある悲しい出来事を話した。

「君たちが戦っている誠が古だったところに、起こったんだ僕の御父さんとお母さんは俺を連れてロシアで極寒旅行を満喫したんだ。ロシアの人々は心が温かいから全然寒くも無かったよロシアって国はと思っっているのもつかの間、古の軍団が、ロシアの都市のひとつイルクーツクという都市が襲われた。つまりこの場所だ、みんなは逃げまくった。俺は、恐怖のあまりにバイカル湖に落ちて命を落としたように思えた。そして、俺はバイカル湖から出た。少しスーパーパーを持っっているような感じあつたけど、そして俺は、自分の父と母上が、紅く染まって死んでいるのを見たそして心に誓った。誠の奴等を殺してやると。」

タイフーンマンズは、黙り込んだ。

「すまない、君たちにこんなむごい話をしてしまつて。」

タイフーンマンは「気にしないで、俺たちだってこんな能力で一度は日本の暴力団の一つキギャク組を全員殺そうと思つたこともあつたでも、実際はスーパーパーを人殺しとしての道具じゃない正義を貫き通す為の道具だということを。」

バットマンもやってきた。

「私だって、同じ惨劇を知った者だ。」

アイスハンドマンは、ニュージェネレーションジャスティスリーグに入ることを決意した。

スーパーパワーは、人を殺めないように制御しなければならないと
いうことをタイフーンマンズは、再び知った。

第七話 善課ゝ説得は失敗を招かないゝ（後書き）

次回、砂漠ゝ呪いのまじないゝです。お楽しみに

第八話 砂漠く呪いのまじないく（前書き）

謎の敵は、呪いの力を使ってきた。

第八話 砂漠く呪いのまじないく

タイフーンマンズとフスリヴィットは、日本にある暴力団の一つヒカリケス組の撃退活動していた。

バットマンや、グリーンアローさらにグリーンランタンも協力している。

今回の戦いには、誠が関わっていることは知っている。

アイスハンドマンとハリードマンとストックウィングは、ヒカリヲケス組の謎の倉庫を見つけた。

スーパーマンとフラッシュとホークマンが駆け付けた。

謎の倉庫の戸をハリードマンが壊した。

タイフーンマンズは、誘導作戦を使っていた。

グリーンアローが矢で相手を捕まえ、捕まえ損ねたところをバットマンとフスリヴィットが協力している。

「ゼーレゲーム・デス・マインド」

闇の光が、30階の建物の窓ガラスを割った。

下にいる15人の不良少年。

「まずい。」

しかし、フラッシュが駆けつけて15人は無事だった。

風は、闇の光を放った者を探していた。

「ジャーマルン・ファッチ・レンカツダ・ダイ」

敵の企みを潰す方法は、幾つかあった。

この呪文は、闇の光をバリアにしていることが分かった。

アイスハンドマンとハリードマンは、謎の倉庫にあるブツを凍らせ

てから燃やした。

アイスハンドマンに要請が掛った。

「任しとけ、風。」

スーパーマンは、たぶんこう思ったのだろう。

「アイスハンドマンとハリードマンの能力は、欠けてほしくない存在だ。」

アイスハンドマンは、バリアに覆われている、悪者を見つけた。

「バリアか、凍らせれば問題ない。」

謎の敵は、バリアが凍らされて、ばらばらに砕けた後、タイフーンマンのパンチを食らった。

そして、拘束した謎の者から証言が。

「誠の野郎は、地球を破壊する計画を練っている。お前らには阻止できない。」

ストックウイングは、誠の軍団がオーストラリアに3万人ほどいるとセンサーが教えた。

オーストラリアには、ニューヒーローがいる。

探さなければ。

第八話 砂漠く呪いのまじないく（後書き）

次回は、地震く第二の自然現象ヒーロー登場！くです。お楽しみに
タイフーンマンズの劇場小説版。1月26日登場予定。

第九話

地震く第二の自然現象ヒーロー登場！く（前書き）

自然現象ヒーロー登場。誠の企みに少しでも歯止めになるのか？

第九話 地震く第二の自然現象ヒーロー登場！く

オーストラリアは、広大な国である。

タイフーンマンズとストックウイングは、砂漠のあちこちを探したり、アポリジミという先住民にも、いろいろ話を聞いた。

どうやら、^{タタセレ}軋という組織というアジトがあるという情報と最近震度2サイズの地震があるという情報を得た。

「どういことだろう?。」

ストックウイングは、疑問に思っていた。

バットマンとグリーンアローが遅れてやってきた。

軋の組織がある一人を追いかけていた。

彼が拳を地面につけた途端、地震が発生した。

「震度2ぐらいだ。」

バットマンの答えは正解であった。

軋の軍団を、タイフーンマンズ達も参加して作戦通りに軋の組織を潰すことに成功。

彼の名前は、デザートリングというオーストラリアのニューヒーローだ。

冷静だがマイペースな性格の持ち主で、地震の能力を得たのは、火山噴火が原因で能力が付いた。

地震を操るということは、タイフーンマンズは、台風を。アイスハンドマンは、寒気を操ることから三大自然現象ヒーローが集まったことになる。

ニュージェネレーションジャスティスリーグに入った彼は、アクア

マンと楽しく会話をしていた。

誠のアジトでは、不気味な人工衛星が発射された。

第九話

地震く第二の自然現象ヒーロー登場！く（後書き）

次回、裏切く誠から裏切ったヒーローくです。お楽しみにと感想よろしく。

第十話 裏切〜誠から裏切ったヒーロー〜（前書き）

今回は、劇場小説版が明日公開されるということで前夜祭です。二本立てです。

第十話 裏切〜誠から裏切ったヒーロー〜

誠のアジトでは、ある反逆が起こっていた。

「貴様、裏切る気なら殺す。」

「てめーらの行為がもう絶交だからな。」

ある一人のヒーローが、何らかの力で8人の敵をねじ伏せた。

このヒーローの名前は、クリパードという英雄だ。

彼は、トルコで生まれた新ヒーローでタイフーンマンズ誕生する9か月前に失踪していた。

誠に、敵の仲間になってしまったがヒーロー魂のおかげで裏切ることになった。

彼の能力は、口から音波を出したり、手と手を合わすことにより千手観音のような、感じになり、相手に凄まじい拳の嵐をおこす。

そして、アジトの壁を破壊して、逃げた。

タイフーンマンズは、ジョーカーを捕まえていた。

「バットマンの大変さも分かって来たぜ。」

誠の3人が監視していた。

水無石キャノンを放つ気でいるらしい。

しかし、3人の読みは甘かった。

アイスハンドマンとストックウィングがいた。

誠のアジトから100000人ほど、放たれた。

リーダーの口から恐ろしい言葉が出た。

「全生命体を排除するのだ。スーパーヒーローも全員殺せ。」

クリパードは、ハリードマンとグリーンアローとバットマンに出会った。

第十話 裏切〜誠から裏切ったヒーロー〜（後書き）

次回は、戦魅〜ニューヒーロー大集結〜です。お楽しみに。感想よろしく

第十一話 戦魅くニューヒーロー大集結く（前書き）

前夜祭終了です。劇場小説版を楽しみにしてください。

第十一話 戦魅くニューヒーロー大集結

クリパードは、バットマンとグリーンアローとハリードマンに出会った。

どうやら敵は、地球を壊す為に、謎の人工衛星を打ち上げたという。

タイフーンマンズ達も駆け付けた。

宇宙には、破壊兵器がある。

誠のアジトは、地上にあった。

一方、誠のアジトには信じがたい出来事が起こっていた。

「お前も裏切る気か。」

「そうさ、誠のアジトは、俺が仕切るのさ。」

そう言って、リーダーの腹にナイフを刺した。

ニュージェネレーションジャスティスリーグとジャスティスリーグは、合同で緊急会議を行った。

「地球のみんなにパニックにならないよう伝える必要があるのは、ニュージェネレーションジャスティスリーグとジャスティスリーグだ。」

「スーパーマンとグリーンランタンとタイフーンマンズは、謎の殺戮人工衛星を破壊する方法を考えます。他の者は、準備を整えます。」

アメリカ空軍と通信をしていた。

タイフーンマンズも他のヒーローもすごく緊張していた。

今回は、地球の存亡もかかっていることと人工衛星破壊プランがうまく立てられていないのである。

フスリヴィトは、グリーンアローに状況報告が出来るようにあるものを渡した。

「これは、何だい？」

「こいつを使えば、遠くても通信がつながる其れに敵の行動も把握できるシステムだ。みんな持っているのにグリーンアローだけが持っていないなんて不自然だからな。」

誠のリーダーは、海に捨てられた。

アクアマンが、其れを確認した。

ジャスティスリーグ基地では、急ピッチで話し合いが行われた。

「太陽光線をシャットダウンしてしまうビームを人工衛星に打ち、スーパーマンが、逆の質力にさせるそうすれば人工衛星は、爆発。そしてグリーンランタンが、そいつを片付けてはい終了という作戦はどうだ。リスクも大きいけどやらなくてはならない運命になってしまっているんだ。」

「タイフーンマンズの作戦なら、台風の力は、太陽光線を70%シャットダウンできる。」

「失敗率が大きいがやるしかない。」

どうやら、この作戦で総てを決めることにした。

第十一話 戦魅〜ニューヒーロー大集結〜（後書き）

次回、終末〜ヒーロー達の賭け〜です。楽しみに。

第十二話 終末〜ヒーロー達の賭け〜（前書き）

ヒーロー達の賭けは、これまでで最大の賭けだった。

第十二話 終末〜ヒーロー達の賭け〜

作戦は、レベルが高すぎる。

タイフーンマンズとスーパーマンとグリーンランタンの作戦は、微調整段階に入った。

フスリヴィトとグリーンアローは、敵のロボットを確認した。

ロボットの排除に力をかけた。

目立つように、戦いがそこらじゅうで起きていた。

ストックウィングは、高速スピしながら敵を排除していった。

「フランスにいた、敵ロボット排除完了。いい汗かいたぜ。」

他のヒーローが、疲れが見えながらも闘い続けた。

誠のアジト

「地球を壊す破壊光線発射準備。」

「準備しています。」

「我等は逃げれるからな。」

ジャステイスリーグ基地

座標を定めていた。

その時、制限時間が鳴った。

人工衛星がビームで地球破壊すまで、あと、59分しかない。

タイフーンマンズの作戦は、間に合うのか？

そして地球の運命は？

次回に続く。

第十二話 終末〜ヒーロー達の賭け〜（後書き）

次回、霧聲〜勝利の力〜。をお楽しみください。感想も宜しく。

第十三話

霧聲く勝利の力く（前書き）

遂に破壊、そして誠は、突然いなくなった。

第十三話

霧聲く勝利の力く

人工衛星が地球を壊すビームを発射するまであと22分だけになった。

地球にいるヒーロー達は、2体のロボットを逃がしてしまったが、ハリードマンが壊した。

「全員そろってお疲れかい？」

フスリヴィットは「ハリードマンも疲れているくせに。」

「ハハハ、凶星だよ全く。」

誠のアジトは、突然姿を消してしまった。

水無石の効果は、絶大と呼ばれている。

なぜなら、人工衛星に打つ時、人工衛星のエネルギータップに水素と酸素が含まれていた。水に変えることによって破壊光線を出す仕組みになっているらしい。

水無石を光線上にして当てれば、発射が止まり後は、人工衛星を太陽のご飯として与えればいい。

「発射準備開始。」

アップデートは、五秒で済み、そして

「発射。」という声によって水無石のビームが放たれた。

そして人工衛星に当たった。

人工衛星からビームが出てこないことを見たみんなは、歓声を上げた。

スーパーマンは、人工衛星を投げて太陽にぶつけた。

戦いは、終わってみんなは寝てしまった。

タイフーンマンズとバットマンとグリーンランタンを除いては。

「誠のアジトがない！」

「どういうことだ。」

「所在を探さなければ。」

謎の出来事は、誠所属の組織が急に増えたことだった。

四日後、アイスハンドマンは日本にとんでもない組織を見つけた。

「缺？」

第十三話

霧聲く勝利の力く（後書き）

次回、解害く犬を闘わせて金儲けする敵達を潰せーくです。お楽しみに。

第十四話

解害く犬を闘わせて金儲けする敵達を潰せ！く（前書き）

s e a s o n 2 最後です。 s e a s o n 3 も見どころ満載です。

第十四話

解害く犬を闘わせて金儲けする敵達を潰せ！

「鉄？」

名前がわからない謎の組織。どうやら誠とかかわりがあるようだ。

アイスハンドマンは、タイフーンマンズの三人を呼び出した。

風と雷と雨である。

さらに、フスリヴィトもやってきた。

犬の鳴き声が聞こえる。

しかも、悲鳴に近い声であった。

「みんな、中に入るぞ。」

風が、そーと扉を開けた。

其処は、犬が無残な姿になっていた。

タイフーンマンズやフスリヴィトやアイスハンドマンはこの光景を見て、この組織を潰さなければと思ったのも悪くない下手をするはまだ生きている犬にまで虐殺の手が伸びるからである。

鉄の**イヌ**という組織の名前の正体は、鉄**イヌ**という名前だった。

タイフーンマンズは、自慢の能力で人を見つけた。

フスリヴィトは、拘束しに行った。

アイスハンドマンは、犬の非常口を作るために壁を凍らせてからその壁をぶちぬいた。

そして、バットマン達に犬は、保護された。

タイフーンマンズは、金庫の中身を見た。

「こいつ等、犬を血みどろな戦いをさせることによって5億円も違法に儲けていたのか。」

その騒ぎを聞いて駆けつけた警察。

「タイフーンマンズじゃないか。久方振りだよ。」

「僕達もです。署長さん。」

「鉄のアジトを潰したのは、すごいよ。というより仲間を作ったのか？」

「ニュージェネレーションジャスティスリーグという部隊です。とても頼もしいしさらにはジャスティスリーグとタッグが組めるチームワークです。」

「さすがだな。」

そしてタイフーンマンズの活躍は、すごいことになった。しかし、こんな矢先に三つの誠所属の組織が企んでいる恐ろしい作戦があった。

タイフーンマンズは、それを阻止することができるのか？

season3を見逃すな。

今後の展開は、後書きを見よ。

第十四話

解害く犬を闘わせて金儲けする敵達を潰せー！（後書き）

season3の予告。三つの組織は、両立しながら多彩なことを企んでいた。そして、タイフーンマンズに現れた新たなヒーローとは？そしてフラッシュがジャスティスリーグを辞任そのわけとは・

・
次回、season3 禁最く尺という組織を探れ！です。お楽しみに感想も宜しく

season 3

第一話

禁最〰尺という組織を探れ〰（前書き）

ハリードマンの活躍に注目です。

Season 3

第一話

禁最、尺という組織を探れ

尺という組織^{セトオン}が、イギリスのロンドンにあることを突き止めたグリーンアローは、さっそくタイフーンマンズとハリードマンに連絡をとった。

「そうか、ロンドンに行けばいいんだな。尺の組織図を基地にデータ入力してくれ。」

「今、やっているところだよ。転送は、完了したぜ。俺は、この場を少し離れる。」

「ここからは、任しといてくれグリーンアロー。」

「分かったよ。」

ジャステイスリーグの基地で、研究をしているタイフーンマンズ。

尺の組織図は、誠と関わっていることが分かった。

「メンバーは、160名で、誠から貰うお金は、宇宙のお金も含めると1千兆ドルになるといわれている。しかもそのお金で、ブツや

麻薬などを作り、他の組織に手渡している。」

ハリードマンは、すごいことに気付いた。

「見てよ。160名のうち1名に、スーパーマンが言う天敵がいるよ。」

スーパーマンの天敵それは、レックス・ルーサーである。

相当な実力者で、ジョーカー並みに悪人としてのたちが悪い。それもヒーローをつけまわすほどの悪い奴でもあり、スーパーマンの弱点、クリプトナイトを持っている。

タイフーンマンズにとっては、スーパーマンの代役として闘うことが考えれる。

なぜなら、タイフーンマンズにクリプトナイトは、通用しないからだ。

ルーサーは、ロボットも所有していることから、ハリードマンだけでなくアイスハンドマン、ウィングストック、クリパードと一緒に

戦うことがいい作戦になると考えた。

一方、ロンドンでは、グリーンアローが気絶して拘束されたまま、尺のアジトに閉じ込められた。

タイフーンマンズは、急いでロンドンの尺のアジトを探したとき、ルーサー所有のロボット6体が現れた。

ハリードマンが火で、ロボットをあぶり次にアイスハンドマンが氷漬けにした後、ストックウイングがロボットの足元を切り裂いた。

ロボットは、倒れこんだ。

クリパードの千手観音の手でロボットを粉々にした。

その後、タイフーンマンズが、ロボットの小さい破片も残らずに消した。

フスリヴィットがタイフーンマンズの一人、雨に言った。

「グリーンアローが攫われている。早く助けなければ。」

みんなも聴いていた。

デザートリングが、無感地震でグリーンアローの位置を確かめた。

「尺のアジトにいる。」

タイフーンマンズは、「ニュージェネレーションジャスティスリーグ行くぞ。」

「おっ！。」　　「っというヒーロー達の声が轟いた。」

season 3

第一話

禁裏、尺という組織を探れ（後書き）

次回、冥月、グリーンアローを救えと謎の暗号。です。お楽しみにseason 3が遂に来ました。

第二話 冥月、グリーンアローを救えと謎の暗号（前書き）

グリーンアローを見つけることが出来たしかし、尺のアジトが違う場所にあることを知る暗号があった。感想一つでもいいのでお願いします。

第二話 冥月、グリーンアローを救えと謎の暗号

尺のアジトに乗り込んだヒーロー達。

部下の145人が襲ってきた。

タイフーンマンズ達の相手ではなかった。

しばらくして歩いていると、ロボット26体が出現した。

しかも運がいいことにさっきの奴とは違い、高性能のロボットだった。

「こいつは、動きが早いな。」

ハリードマンも先ほどの作戦がうまくいかなくなっていて、イライラしてきた。

アイスハンドマンは、ロボット16体を氷漬けにした。

ストックウィングが再び切り裂いた。

ロボットは、タイフーンマンズの作りだした雲によって全部破壊された。

グリーンアローを助けたが、どうやら、アジトというより、別アジトのようだった。

尺のアジトは、あと二つあった。本物は、ひとつだけ。

デザートリングが壁に震度5強の揺れを与えて外壁を崩した。

「もうひとつの場所が特定次第、動くぞ。」

「それまで俺は、休んでいるかな。」

フスリヴィットは、グリーンアローに言った。

「ニュージェネレーションジャスティスリーグがピンチの時は、来いよ。」

「分かったよ。そんな時はないと思うけどな。」

グリーンアローは、ときには、仲間を信頼しないときがあるが、そういうことは、滅多にない。

バットマンは、新たな尺のアジトらしき場所を見つけた。

どうやら、デンマークらしい。

タイフーンマンズ達は、其処に向かった。

一方、フラッシュは、何か思惑を感じていた。

尺のアジトに、こんなものがあつた。

タイフーンマンズも知っているクリプトナイトだ。

ハリードマンは、あたりを見回ることを思いつき見回し始めた。

アイスハンドマンは、尺の味らしきものを見つけた。

1人だけ、見張りがいた。

一方、古代都市アトランティスでは、アクアマンが誠の元リーダーの遺体を見つけた。

暗号も落ちてきた。

アクアマンは、其れを呼んだ。

「冥王星の者達よ、今すぐに地球を冷やして殺せ何もかも。っておい、緊急事態じゃないか。」

もうひとつの事態も起きていた。

フラッシュが、イランの山奥で、ある組織と金の渡しあいをしてい

ることが分かった。

第二話 冥月、グリーンアローを救えと謎の暗号（後書き）

次回、好加減、尺の第二のアジトです。お楽しみにと感想よろしく。

第三話 好加減、尺の第二のアジト（前書き）

はずれであったが、ここで手がかりを見つける。

第三話 好加減、尺の第二のアジト

アイスハンドマンが、見つけたアジト。

別アジトでありながら、このアジトの見張りが一人しかいないのが不自然であった。

タイフーンマンズが、様子を覗いながら、行動していた。

「警戒しないと罠の可能性がある。」

フスリヴィトが、タイフーンマンズの合図とともに、ケーブルを投げた。

見張りの一人をケーブルで拘束し、タイフーンマンズは、アジトの中に入り込んだ。

相手は、弱かったため、簡単にアジトを潰した。

同時に本アジトは、何処にあるかを聞いたハリードマンは、ある国を知った。

「ウクライナには、俺の親友ヒーローがいるぜ。ニューヒーローだ。」

タイフーンマンズは、ニュージェネレーションジャスティスリーグの仲間に出来ると考えてウクライナに行った。

本アジトでは、スーパーマンが嫌う敵がいた。

一方、冥王星では、危険な人物が地球に向かおうとしていた。

第三話 好加減、尺の第二のアジト（後書き）

次回は、鍼形、轟く動きです。お楽しみに

第四話 鉦形く轟く動きく（前書き）

尺のアジトは、遂に崩壊する。そして次の新たな組織が、さらに新たなヒーローが登場。フラッシュに疑惑が浮上。この急展開は見逃せません。

第四話 鋳形く轟く動き

ウクライナについたヒーロー達は、まずアジト探しを始めた。

其処は、のどかな風景で黒海が見える場所だった。

「尺のアジトが、ここにあると思うと景観を台無しになるからな。」

タイフーンマンズの一人、雨がある建物を発見した。

「黒海のとこに、奇妙な建物があるぜ。」

ハリードマンは、目を凝らしてみたら、尺のアジトであったことを確認した。

「尺のアジトだ。しかし俺は、あそこには、行けねえ。」

フスリヴィトは、あることを考えた。

「ニューヒーローの姿がまったく見えんな。」

アイスハンドマンは、水を触った。

「凍るのは凍るけど、環境まで変わったらだめだから、難しいよ。」

その時、西の方角から声がした。

「君たち、ニュージェネレーションジャスティスリーグだよね。」

鬼みtainな人物と天狗みtainな人物だ。

ハリードマンは、知っている。

「この二人は、ワラットマンとアウトファイヤーだ。ここで活躍する名コンビヒーローだよ。」

デザートリングは、すごいことを思いついた。

「直進型津波を作り、尺のアジトを麻痺させて、レックス・ルーサーを俺達で逮捕させれば作戦終了ってのは、どうだ？面白いだろ。」

タイフーンマンズは、作戦には反対しない。

「僕達が、津波を操って、尺のアジトにぶつける。そして、アイスハンドマンとハリードマンとストックウィングは、ロボットを破壊してくれ。ワラットマンとアウトファイヤーは、レックス・ルーサーの身柄を拘束する。作戦の中に少し改造を施した。」

そして、作戦が実行された。

デザートリングが、水面に震度6強を当てた。みなも

津波が発生した。

タイフーンマンズは、雲の力で津波を直進型に変えて、尺のアジトに誘導させた。

津波は、尺のアジトにダイレクトに命中した。

みんなは、慌てていた。

アイスハンドマン達は、動こうとしているロボットを破壊し始めた。

「おりゃー。」

「アイスハンドマンとストックウィング上がってくれここは、俺の火で焙るぜ。ほーらよっと。」

レックス・ルーサーは、ワラットマン達に拘束された。

そして、尺のアジトは、崩壊した。

レックス・ルーサーは、ウクライナの警察に連れて行かれた。

「ニューヒーローの弱点を暴いてやる覚悟しろよ。」

ジャスティスリーグの基地に戻った、タイフーンマンズ達。

ワラットマンとアウトファイヤーは、気に入ったらしい。

スーパーマンは、あることを言っていた。

「フラッシュが裏金問題を作り出し始めた。僕は、知りたくもない

な。
」

バットマンは、イランの山奥にあるアジトの名前を検索していた。

「出たぞ、組織名は、^{コバヤイ}竣という名前だ。メンバーのほとんどは、テロ組織にいた者らしい。」

フラッシュは「俺がするわけないだろ。」

ホークマンの否定語が聞こえた。

「貴様は、知られているんだぞ。フラッシュ、お前は、タイフーンマンズにそのことばれているかもしれないんだからな。」

「いい加減にしろ。ホークマン、俺は、地球にいるからな。」

ジャスティスリーグに波紋がうねり始めた。

そんなことよりも、刻一刻と近づく冥王星の者。

タイフーンマンズは、その脅威を目撃してしまうのか？

アウトファイヤーとフスリヴィトは、グリーンランタンがみている映像を見ていた。

「フラッシュの野郎、それでも逃げるとは、いい加減な奴だ。」

「竣のアジトを潰しに行けば真実が分かるかも。」

「それもそうだな。」

第四話 鍼形く轟く動きく（後書き）

次回は、俊足く疑われたフラッシュの行方くです。お楽しみに

第五話 俊足く疑われたフラッシュの行方く（前書き）

竣のアジトは、何処なのか探すタイフーンマンズ達。スーパーマンは、アクアマンと出逢い恐るべきことを話した。

第五話 俊足く疑われたフラッシュの行方

タイフーンマンズとストックウィングは、アジアとオセアニアでフラッシュを探すことにした。

簡単に行かない為、フスリヴィトとプラスチックマンとハリードマンは、アフリカで探すことになっている。

アイスハンドマンとデザートリングとワラットマンは、ヨーロッパで探した。

そしてバットマンとグリーンアローとアウトファイヤーは、アメリカ全体を探した。

しかし、フラッシュは、何処にもいなかった。

「何処にいるんだ全く。」

「デザートリング、何かわかったか？」

「竣のアジトを見つけた。フラッシュのいる可能性は十分に考えられる。」

デザートリングは、無感地震を使っている探していた。

「役に立つ、地震ヒーローだぜ。」

タイフーンマンズの一人、風は、うなずきながら言った。

「プラスチックマン、一回は組んでみたいヒーローだろ。デザートリングは？」

「組みたいね。俺もカッコ良くなりたいたいから。」

プラスチックマンは、金にきたないが、それは昔のことだ。

昔、彼は強盗犯だったが、後にプラスチックマンになりてヒーローとなった。

その能力は、よく伸びる。

一方、スーパーマンは、アクアマンに呼ばれてやってきた。

「やあ、来てくれたかスーパーマン。」

「何の用だアクアマン？」

「これを見てくれ。」

紙の中身を見たスーパーマンは、驚いていた。

「本当か？」

「嘘だつたら、こんなものはないぞ。」

冥王星から、狂気の空気が少しずつ地球にやってきた。

第五話 俊足〜疑われたフラッシュの行方〜（後書き）

次回は、竣罪〜潰せアジトそしてフラッシュの安否〜。次回もお楽しみに。

第六話 竣罪く潰せアジトそしてフラッシュの安否く（前書き）

アジトを潰したかと思いきや新たなアジトが其処にフラッシュの情
報が

第六話 竣罪く潰せアジトそしてフラッシュの安否く

デザートリングは、竣のアジトを見つけてくれたおかげで、タイフ
ーンマンズもやってきた。

タイフーンマンズは、あることに気付いた。

「ここにフラッシュの気配がない。」

デザートリングは、無感地震で、組織内の状況を調べた。

「どうやら荒らされた跡がある。」

しかし竣のアジトは、あるものと連絡した形跡を残していた。

新たなアジトが分かった。

其処は、^{モノモノ}蜘蛛という組織だった。

この組織と竣のアジトの関係が次回、明らかになる。

まだ明かされない冥王星から来る恐怖とは一体？

まだまだ波乱の予感が続く。

第六話 竣罪ゝ潰せアジトそしてフラッシュの安否ゝ（後書き）

次回は、黙殺ゝ黙り込んではいけないゝ。お楽しみに

第七話 黙殺↪黙り込んではいけない↪（前書き）

蜘蛛という組織にある宗教が関わっていたのが来ている。

第七話 黙殺く黙り込んではいけないく

風と雷は、アクアマンのいるところにやってきた。

「アクアマンか、何だ用って？」

アクアマンが、二人を古代都市アトランティスに連れて行った。

アクアマンは、ある手紙をタイフーンマンズの二人に見せた。

「これは、誠のアジトの特殊ナイフじゃないか。アクアマン何か手掛かりを知っているのか？」

アクアマンは手紙の中身を読み上げた時、ひとつ気になることがあった。

「アクアマン、この自然教という宗教は？」

「俺のアトランティスでは、一時、話題になった悪徳宗教だよ。」

タイフーンマンズは、冥王星の帝王と新たな誠のリーダーは、かわりがあることを知っている。

アクアマンは、フラッシュの容疑を確認したがっていた。

「タイフーンマンズのお二人に質問だが、フラッシュの容疑は晴れないままか？」

風が答えた。

「こちらのチームも頭を抱えるぐらいですよ。全く、フラッシュの奴とんでもない行為をしでかしたなってね。」

アクアマンは、一つだけ気になることがもう一つあった。

「誠軍団、失踪してからどれぐらい経つか教えてくれ！」

雷が答えた。

「失踪してから、半年は経過してますよ。」

「そうか半年か。」

「我々は、別のアジトの撲滅にむ飼わなければならないので失礼いたしました。」

「ヒーロー同士だ。困ったことがあったら聴いてくれ。」

タイフーンマンズは、蜘蛛のアジトに向かった。

一方、グリーンランタンとクリパードは、誠の元リーダーの遺体を見つけてしまった。

「多量出血死だ。」

「このことは、タイフーンマンズにも知らせてくれ。」

「了解、グリーンランタン。」

複雑に絡んだ歯車が遂に可動し始めた。

それは、ジャスティスリーグチームとニュージェネレーションジャスティスリーグチームにとっても心が痛むほどの歯車の動きは、止められるのか？

そして、2013年6月22日に地球は、三度目の世紀末を迎える

と描かれた文章明確に描かれているところをアクアマンがチェックしていた。

「2013年6月22日の時計の針が重なる頃に地球は冥王星の領土となる。」

第七話 黙殺〜黙り込んではいけない〜（後書き）

次回は、煉獄疾風〜知られざる涙〜です。お楽しみに。

第八話 煉獄疾風く知られざる涙く（前書き）

迫りくる6月は、何とも虚しい物であった。

第八話 煉獄疾風く知られざる涙く

2013年5月28日。

この日は、大雨が降っていた。

タイフーンマンズにとっては、好都合だが、貸切部屋に閉じこもって外を確認しているようである。

実は、タイフーンマンズ、警察と協力してある虐待事件を解決してほしいという報告であった。

「俺は、こんなことやってていいのかな？」

フスリヴィトは、困り果てていた。

なぜなら、バットマンは、ブルース・ウェインとして買い出しに行っているからである。

フスリヴィトは、イギリスで起きた銀行強盗を16人も捕えたぐらいの手柄がある為、タイフーンマンズと一緒にいた。

バットマンは、幾つかの犯罪者との戦いで勝利を重ねている実績がある。

「みんな、買い出しするのに時間がかかってね。」

ブルース・ウェインは、バットマンになり、タイフーンマンズと変わった。

バットマンは、ある人を見た。

少年だが、足の動きが変だった。

フスリヴィトが、保護をしてあげた。

あざだらけで、洋服が一部破けていた。

どうやら、少年は、声が出ないようにになっていた。

タイフーンマンズは、親がこっちに乗り込んでくるのを見た。

バットマンは、通させなかった。

そしてフスリヴィットは、ケーブルで拘束した。

今回は、お手柄だが、タイフーンマンズ達は、やりきれない空気であつた。

其れは、フラッシュの裏切疑惑と冥王星人襲来のことであつた。

ハリードマンは、蜘蛛という組織を見つけたという報告があつた。

第八話 煉獄疾風く知られざる涙く（後書き）

次回は、見殺く蜘蛛を智るくです。お楽しみに

第九話 見殺し蜘蛛を語る（前書き）

混乱を招く中で、バットマンの宿敵が語るとんでもない真実とは。

第九話 見殺し蜘蛛を智る

冥王星人襲来という、厄介な出来事だけでなく、フラッシュの裏切疑惑があつた。

それだけでなく、なんとバットマンとスーパーマンに話したいという人物がいた。

其れは、バットマンの永遠の宿敵、ジョーカーだった。

「よおー、バットマンとスーパーマンか。久しぶりだな。」

「ジョーカー私達を呼び出して、なんか犯罪をしようと企んでいるのか？」

「そうじゃないよ、バットマン。お前等がほしがっている情報を手に入れたんだよ。」

「それは、本当かジョーカー。」

「ああ、本当さスーパーマンよ。フラッシュの裏切は本当だぜ。」

バットマンとスーパーマンは、ジョーカーを敵ながらも天晴という目線で見ていた。

スーパーマンは、質問をぶつけた。

「ジョーカー、フラッシュが裏切る映像を持ってないか？」

「持っているとも、俺の部下がとんでもねえもん映してしまったと言ってたからな。」

映像の中に、フラッシュがいた。

「やはり、フラッシュの裏切疑惑は、確信に変わったな。」

映像を見ると、誠の新リーダーがいた。

「こいつは、何者なんだ？」

「こいつは、誠の新リーダー・クロス・キルドだ。俺がそんなくだらない組織に詳しいのは俺の部下が誠という邪魔な組織をスパイして俺に情報を送ってくれているからだよ。そのせいで悪さが出来る回数が減った。」

フラッシュは、クロス・キルッドに誘拐した、アメリカの国会議員を渡した。

そして、クロス・キルッドとフラッシュは、藤色のガスの中で消えた。

誘拐した国会議員と一緒に。

スーパーマンとバットマンは、ジャスティスリーグの基地に戻り、みんなに話した。

「やっぱり裏切ったのか。」

「ちょっと、自信が穢れるよ。」

ハリードマンは、落ち込んでいた。

冥王星人を倒す為には、ヒーロー達を結集するしかない。

これは、ヒーローと悪の大戦争だ。

第九話 見殺し蜘蛛を智る（後書き）

次回、大集結！ヒーローの力を舐めないで！です。お楽しみに

第十話 大集結！ヒーローの力を舐めないで（前書き）

ヒーローが揃い、ますます熱くなる展開。冥王星人が降臨してしまう。

第十話 大集結、ヒーローの力を舐めないで

これは、ヒーローと悪の大戦争だ。

冥王星人のリーダーは、誠の行動を妨げていた。

タイフーンマンズの五人と、フスリヴィトは、その冥王星人の観察部隊を探していた。

「まさかと思うが、冥王星人の観察部隊がいるとは思わないな。」

フスリヴィトは、言っていたがどうやらそうである。

ジャスティスリーグ基地では、暗号が送られてきた。

バットマンが、読み上げた。

「97700154886321005621458799546
+ - 8 + - - + . 3 2 . 3 6
」

ハリードマンとアイスハンドマンとストックウィングとデザートリ

ングは、はてなマークが頭の上にあった。

タイフーンマンズの一人が、読み上げた。

「悠久に闇に葬るならば、夢を崩した自然に恨みを持つならば人を7人殺めろ。自然教新新約聖書第8の32項の36。」

バットマンとスーパーマンは、知っていた。自然教の聖書の一部を。

アクアマンは、自然教の別の聖書を読み上げた。

「確実な真実を得たいならば、緑で十字を描き、赤で丸を描き、青で三角が二つ重なっている形を作り出して、目を閉じて25秒間瞑想すれば、台風の六の魔法陣に明かされる。自然教新新約聖書第1の75の項の3。」

その時である。

冥王星人が、降臨してしまった。

「お前等の行動を崩してやる。」

タイフーンマンズは、最大の考えを出そうとしていた。

「二つの聖元か。」

第十話 大集結！ヒーローの力を舐めないで（後書き）

次回は、早衆！最大の危機！。お楽しみに。

第十一話 早衆、最大の危機（前書き）

冥王星人に捕らわれたスーパーマンとハリードマン。そして、古代都市アトランティスに最大の危機が訪れる。

第十一話　早衆、最大の危機

冥王星人がやってきてしまった。

スーパーマンとハリードマンは、威嚇攻撃を開始した。

しかし、冥王星の技術が上だったのかやられてしまった。

タイフーンマンズとアクアマンは、ある真実を得ようと考えていた。

それは、冥王星人襲来の手紙は、古代都市アトランティスの滅亡の危機も教えていた。

其処で、バットマンとアイスハンドマンを呼び出した。

冥王星人の軍団が現れた。

攻撃が始まる直前、クリパードが冥王星人を撃退していた。

「こいつ等、ウジ虫のように湧いてくるな。」

「アウトファイヤー、その発言は、今後気をつけたらどうですか？」

「すみません。」

タイフーンマンズは、雲の力で、イルカを誘導していた。

「雲の迷路を作り出して、海の生き物をアクアマンが、アトランテイスを警護できるような態勢に出来たそして、雲の迷路は、行き止まりが多い為、雲で潰して撃退が可能。」

ジョン・ジョーンは、やってきた。

「冥王星は、太陽系の中で、地球に続く発展途上の星だ。」

タイフーンマンズは、一つ聞いた。

「ジョンがいた、火星は、どんな星なんだい？」

「技術は、今の地球の上だったな。砂嵐から我々を救うシールド装置があった。」

「懐かしいと思いますが、今の火星の復興は太陽系の中でも絶望的です。」

「そうだな。だが、いずれ復興することを祈っている。」

「だったら、地球でよく言われている神様に・・・」

アクアマンが、何かを見ていた。

それは、捕らわれたスーパーマンとハリードマンだった。

「いったい何事だ。」

第十一話 早衆、最大の危機（後書き）

次回は、宵魔、甚だしくです。お楽しみに。

第十二話 宵魔く甚だしく（前書き）

非常事態発生。

第十二話 宵魔く甚だしく

アイスハンドマンとグリーンランタンは、隠れていた。

冥王星人が一人だけやってきた。

「凍らせるか。」

しかし、ここぞとばかりではすまないことが起きている。

タイフーンマンズは、冥王星人を倒していった。

「数が多すぎる。」

「全くキリがないな。」

アクアマンも苦戦を強いられていた。

スーパーマンとハーリードマンは、何とか脱出して、冥王星人の行動を止めていた。

一方、フスリヴィトも苦戦を強いられていた。

冥王星人のほかに、誠の組織の一人が現れたらしくそいつを捕まえようとしていた。

「擾乱覚醒！」

タイフーンマンズの一人、タイフーンマンパワーを上げて一気に冥王星人を吹っ飛ばした。

「これで一気に行くか。」

第十二話 宵魔、甚だしく（後書き）

次回は、怒涛浸透く怒りの鉄拳は悪を滅ぼす。お楽しみに

第十三話 怒濤漫透く怒りの鉄拳は悪を滅ぼすく（前書き）

冥王星人が一網打尽となる作戦がヒーロー達により立てられた其の作戦とは？

第十三話 怒涛漫透く怒りの鉄拳は悪を滅ぼすく

ヒーロー達は、無事に全員合流した。

冥王星人に見つからない建物の地下で冥王星人を追っ払う作戦を立てていた。

デザートリングとフスリヴィトは、とても良い作戦を立てた。

「俺達は、二人一組作戦ということだけど、チーム分けが必須なんだ。」

「チーム分けは、バットマンにやってもらうことにしたから。」

バットマンは、案外取れそうなチーム分けをした。

そして、できたチーム分けの一覧が出てきた。

グリーンアローとジョン・ジョーンというペア。ジョーンが冥王星人に変装して、グリーンアローが、拘束縄を放って冥王星人を捕まえる。

タイフーンマンズの風とハリードマンのペア。炎を風で起こして炎の竜巻通称火炎疾風を巻き起こすことが出来る。

ストックウイングとフラットマンのペア。活躍期待に胸が躍るぐらいのコンビネーションになると信じている。

タイフーンマンズの雨とアイスハンドマンのペア。雨を凍らせて雹みたいにすることによって、冥王星人を脅かせる力が発揮されるという連携技が取れる。

デザートリングとアクアマンのペア。地震で、冥王星人をびっくりさせて海に入ったところをアクアマンが呼び寄せた海の生き物で攻撃を行える。

タイフーンマンとスーパーマンのペア。怪力が自慢の部分もあるしスーパーマンにない力が、タイフーンマンにあって、タイフーンマンにない力が、スーパーマンにある。

他にもペアが大勢存在している。

「これより、ジャスティスリーグとニュージェネレーションジャスティスリーグの合同緊急事態作戦を遂行する。」

「了解。」

タイフーンマンとスーパーマンは、台風の雲を利用して、おびき寄せ作戦を発動した。

「スーパーマン、冥王星人が来たら、合図をしてくれ。」

「分かった。さっそく来たようだ。」

タイフーンマンは、雲を大砲の弾のように撃った。

冥王星人は、ふっ飛ばされた。

バットマンとフスリヴィットは、冥王星人を見つけていた。

第十三話 怒濤漫透ゝ怒りの鉄拳は悪を滅ぼすゝ（後書き）

次回は、暗格柱ゝ冥王星人との最終決戦ゝ。お楽しみに

s e a s o n 3 最終回 暗格柱く冥王星人との最終決戦く（前書き）

戦いが、沸騰してそれがおさまると今度は、正式に裏切り行為が決定した。

season 3 最終回 暗格柱、冥王星人との最終決戦

バットマンとフスリヴィトは、冥王星人が、一般人を襲おうとしたところをバットマンは自慢の武器で、防ぎまくった。

フスリヴィトも、ケーブルの縄を大量に出して、冥王星人達を拘束することに成功した。

「バットマンも、一つぐらいは、俺にぴったりの武器をくれてもいいだろう。」

「フスリヴィト、君は、自慢の縄が、最高の武器ではないか。」

「一理とられたぜ。」

二人は、楽しそうに笑っていた。

タイフーンマンとスーパーマンは、台風の雲を追加して、スーパーマンは、それを大砲のように拳で撃った。

「冥王星人の数が多すぎて、キリがない。」

タイフーンマンは、風で冥王星人を吹き飛ばした。

「冥王星には、風が吹いているかは不明だが、吹き飛ばす風に弱いことは感知していた。」

スーパーマンのペアの体制は、とても良い感じである。

戦いは、8時間経過した。

冥王星人は全員逃げて行った。

タイフーンマンズも一安心のところだが、フラッシュの裏切りをどう判断するか決めていた。

バットマンが言った。

「俺も、これ下すのは心が痛い。しかし裏切は事実だよってフラッシュをジャスティスリーグを永久的に外すことを決定する。」

この戦いは、裏切によるものではなく、誠のリーダーが、新しい誠のリーダーによってもたらされた戦いと下剋上が原因である。

タイフーンマンズは、あるものを手にして、フラッシュがいるところに行った。

誠は、元の場所に戻って、作戦を立てていた。

s e a s o n 3 最終回 暗格柱ゝ冥王星人との最終決戦ゝ（後書き）

次回は、s e a s o n 4 第一話 接点無用ゝ思惑が残る正義達ゝ。
お楽しみに

s e a s o n 4 第一話

接点無用ゝ思惑が残る正義達ゝ（前書き）

コメディな部分があります。

Season 4 第一話 接点無用ゝ思惑が残る正義達ゝ

タイフーンマンズの一人、雨は、テロ組織を見つけていた。

其のテロ組織は、まだ誠とはつるんでいない。

しかし、嫌な相手であることは承知の上である。

アイスハンドマンは、氷を使って、テロ組織の爆弾を氷漬けにした。

しかも溶けると水になる為、漏れている火薬や機械がショートして
使い物にならなくなる。

テロ組織の一人が、フスリヴィットに捕まった。

ハリードマンは、拳銃を溶かした。

「アイスハンドマン、新しい鉄にしてくれ。」

「ハリードマンの能力があれば拳銃も只の鉄筋だね。」

タイフーンマンズの一人、風は、7機の戦闘機の相手をしていた。

「無人飛行か、だが、それによる雑な動きが多くて困るね。」

突風の力で、次々と撃墜させていった。

デザートリングは、水無石を放とうとしているテロリストを見つけた。

「今日、22時38分頃、テロリスト組織付近で震度5弱の地震が発生しました。それにより、水無石の発射台が壊れるという事故が発生しました。」

ストックウィングは、デザートリングに言った。

「ニュース速報するなら、マスコミの方がうまいぞ。」

「そうですか。冗談も通じない奴!」

「それを言っなよ。」

クリパードは、千手観音の手で、組織に使われる危険兵器を破壊していった。

「まだあるのか。」

テロリストの一人は、クリパードを襲おうとしていたが、タイフーンマンズの雷が雲で拘束した。

「くそ、はがれない。」

「雲って本当にしぶといね。」

テロ組織のリーダーは、ワットマンとアウトファイヤーが退治した。

テロリストたちは、警察に捕まった。

タイフーンマンズ達も、とても良い気分であった。

フラッシュが、ジャスティスリーグ基地に侵入しようとするまでは。

s e a s o n 4 第一話 接点無用〜思惑が残る正義達〜（後書き）

次回は、第二話 後悔〜けじめの戦い〜。 お楽しみに

第二話 後悔くけじめの戦い（前書き）

フラッシュVSフスリヴィット&バットマンという戦い。これはけじめに対するバトルである。

第二話 後悔くけじめの戦い

タイフーンマンズは、フラッシュが入ってくるのを目撃した。

デザートリングは、フラッシュに言った。

「お前は、ジャスティスリーグから退会しているんだが知らなかった。」

「俺は、裏切ったつもりはない！」

怒鳴るように言ったフラッシュ。しかし

「けじめの戦いを付けるならどうだ！」

フラッシュの発言は、彼等をびっくりさせた。

バットマンとフスリヴィットは考えた。

考案を打ち立てた。

「フラッシュが、勝つことが出来れば再加入。負けたら、永久追放となります。」

フスリヴィトとバットマンは、フラッシュの行為を注意できずにいた為、このような出来事が起こってしまった。

此のけじめの戦いは、ヒーロー達の心も痛くなるほど悲しみのある激闘となることになってしまう。

「バットマンも苦しい気持ちがある。俺だってそうだ。」

フスリヴィトは、バットマンの作戦を聴きながら言った。

「其の作戦に俺の作戦をプラスすると、フラッシュの苦手な攻撃が出来る。」

バットマンは、興味を持った。

フスリヴィトの作戦とは一体何なのか？

戦いは、次回に続く。

第二話 後悔くけじめの戦いく（後書き）

次回、第三話 涙抄く勝利の行方は大変なことにく。お楽しみに

第三話 涙抄く勝利の行方は大変なことに (前書き)

フラッシュとのけじめの戦い。しかし、これが誠のあるものに・・・

第三話 涙抄く勝利の行方は大変なことに

フラッシュとフスリヴィット&バットマンは、はじめの戦いをするため、スタジアムで戦いを開始しようとしていた。

タイフーンマンズとスーパーマンとハリードマンとアイスハンドマンとホークマンとアウトファイヤーとグリーンアローとグリーンランタンは、心配していた。

「この戦いで、フラッシュの本格的脱退決定になるかの運命だな。」

タイフーンマンズは、戦闘を開始した。

バットマンとフスリヴィットは、フラッシュの気を紛らわす作戦に入った。

フラッシュは、見抜こうとしていた。

バットマンの拳にフラッシュは、30センチメートル吹っ飛んだ。

フスリヴィットは、USBケーブルでフラッシュを拘束した。

「くそ、なぜだ！」

「お前の裏切り行為は、根に見えていたんだよ。」

「くっ、負けだよ。」

フラッシュは、その場を後にしてしまった。

フスリヴィトとバットマンは気にしてなかったが、レッド・トルネードがある映像を見せた。

「これを見て。」

映像の中に誠がいたことが分かった。

タイフーンマンズは、あることを知った。

誠の中に、異世界のバットマンとスーパーマンがいることに。

「なぜ、こいつ等が？」

第三話 涙抄ゝ勝利の行方は大変なことにゝ（後書き）

次回 第四話 偽義ゝオウルマンとハイパーマンゝ。お楽しみに

第四話 偽義〜オウルマンとハイパーマン〜（前書き）

パラレルワールドのバットマンとスーパーマンは、悪者であった。
タイフーンマンズの実力が今、明らかになる。

第四話 偽義〜オウルマンとハイパーマン〜

バットマンとスーパーマンは、こいつ等を知っている。

「この世界に、なんでハイパーマンとオウルマンがいるんだ？」

「時空の歪みが原因だな。」

バットマンは、時空の歪みを映像から見つけた。

タイフーンマンズは、パレルワールドのバットマンとスーパーマンと闘ってみたいと思っている。

それは、既に現実の物となった。

ハイパーマンとオウルマンは、宝石店で誠が盗めと言った宝石を盗んだ。

タイフーンマンズ達が、彼らの足止めをした。

「俺達の雲の力を喰らえー！」

「愚かな奴どもだ。」

ハイパーマンは、雲をぶち破った。

雷と風は、雨と一緒にフォーメーションをとった。

オウルマンは、フォーメーション崩しを始めた。

「駄目だ、作戦を考えなければ。」

タイフーンマンとハイパーマンは、ぶつかりまくっていた。

第四話 偽義〜オウルマンとハイパーマン〜（後書き）

次回は、第五話 高利〜作戦成功のカギ〜。お楽しみに

第五話 高利く作戦成功のカギく（前書き）

フォーメーションは、成功するか？そして誠の新たな作戦が明らかに

第五話 高利く作戦成功のカギ

オウルマンは、タイフーンマンズの死角を狙っていた。

其処を止めようと考えたスーパーマンとバットマン。

タイフーンマンズは、ハイパーマンを攻撃しようと考えていた。

「風の力では、ハイパーマンに効果がない、雲の力で圧迫させるんだ。」

スーパーマンは、特殊の袋に入っているクリプトナイトをタイフーンマンズに渡した。

タイフーンマンズには、クリプトナイトの効果はない為、自由触れたりすることが出来る。

「そうだ、これでハイパーマンを懲らしめられる。」

バットマンは、オウルマンを倒した。

「一つの世界に、悪の自分と正義の自分が必要いらなからな。」

風と雨と雷と波は、クリプトナイトを雲で砕いて、ハイパーマンを弱らせた。

そして、タイフーンマンの強烈な一撃が効いた。

「パラレルワールドに返そう。」

「そうだな！こいつ等はパラレルワールドがお似合いだからな。」

一方、誠のアジトでは恐ろしいプランが設立していた。

「再び、地球破壊計画を実行に移すことにした。」

「人工衛星は、破壊されています。」

「我々には、タイフーンマンズと同じパワーを持つロボットを作り上げたこいつ等を使って地球を破壊しよう。という計画だ。」

タイフーンマンズ達は、誠の企みに少しだけマークをしていた。

第五話 高利く作戦成功のカギく（後書き）

次回は、第六話 伍百紋く地下鉄をハイジャックした者く。お楽しみに

第六話 伍百紋の地下鉄をハイジャックした者（前書き）

フスリヴィトが追いかけてまわした揚句、違う国に逃げた厄介な敵。

第六話 伍百紋、地下鉄をハイジャックした者

タイフーンマンズは、バットマンと一緒に最近、ジョーカー軍団が暴れ始めている為、暴れを食い止めることにした。

グリーンアローとフスリヴィットとハリードマンとアイスハンドマンとデザートリングも参加していた。

「フスリヴィット、あいつを頼むぞ。俺は、バツと一緒にジョーカーを捕まえる。」

「了解。」

アイスハンドマンとハリードマンは、動きの鈍いジョーカー軍団の二人組を追いかけていた。

「コンクリートに直接、熱を出したんだよ。アイスハンドマン後始末を頼むぜ!」

「任しとけ!」

アイスハンドマンは、道路を凍らせた。熱が強いところは氷が水に

なってしまう為、ジョーカー軍団の二人組は、滑って転んだ。

バットマンとグリーンアロー達は、ジョーカーをとっ捕まえた。

「くそー、バットマン。仲間を呼んで対抗するとは卑怯な。」

「卑怯？それはお互い様だ。」

ジョーカー軍団は警察に捕まった。

フスリヴィトは、ある人物を見た。

「あいつは・・・」

ジャスティスリーグ基地に戻ったみんなは、休息をとった。

地下鉄がハイジャックされるという事件が発生した。

フスリヴィトは、かつてロンドンで、連続放火魔を捕まえようとした時、あえなく逃げられてしまった敵である。

「そいつの名は、メートヴァンス。炎を使って連続放火をすることがある悪者です。」

タイフーンマンズは、フスリヴィトと一緒に地下鉄に行くことにした。

メートヴァンスは、炎で線路を熱した。

脱線させて被害をもたらすつもりである。

第六話 伍百紋ゝ地下鉄をハイジャックした者ゝ（後書き）

次回、第七話 黙炎ゝ正義の炎は悪の炎より強しゝ。お楽しみに

第七話 黙炎く正義の炎は悪の炎より強しく（前書き）

正義の炎に逆らえる悪の炎はない。

第七話 黙炎く正義の炎は悪の炎より強し

メートヴァンスは、楽しそうに路線を溶かしていた。

「大問題を作るのは楽しいな」

「そうはさせないぞ。メートヴァンス！」

「タイフーンマンズとフスリヴィト。まっ、もうじき電車が来る。」

電車がやってきた。

雨と雷は、電車を雲の力で止めた。

メートヴァンスは、風に火をかけたが効きはしない。

「燃え盛る台風の力を思い知るがいい。」

「グワァー！」

メートヴァンスは、吹き飛ばされた。

タイフーンマンズの活躍のおかげで、ロンドンのこの騒ぎはおさまった。

しかし、誠の企んでいることは、まだ分からない状態である。

アイスハンドマンは、あることを見つけていた。

「これは、良い情報だ。タイフーンマンズ達に報告しよう。」

第七話 黙炎〜正義の炎は悪の炎より強し〜（後書き）

次回、第八話 幡花〜レッドトルネードの悩み〜。お楽しみに

第八話 幡花〜レッドトルネードの悩み（前書き）

レッドトルネードが困っていることそれは、誠に関係があった。

第八話 幡花〜レッドトルネードの悩み〜

エトリガンは、レッド・トルネードとチェスをしていた。

「ロボットは、本当に強いなー。」

「報告する。貴方も結構強いですよ。」

アイスハンドマンは、ビックリしていた。

エトリガンは、悪魔ながらもヒーローと呼ばれた者であり、バットマンと協力してアスタロスを倒したという経歴を持つ。

タイフーンマンズ達のニュージェネレーションジャスティスリーグのメンバー達がやってきた。

「これは、これはエトリガン。このようなところで出会つとはいいい感じですね。」

風が言った。

「貴方達の戦いを煉獄から見させて頂いてます。」

レッド・トルネードは、ある事を言った。

「みんなは、此の私が困っていることというのは、タイフーンマンズのような力を持つロボットに対抗する方法を模索するのに困っている。」

誠のアジトにエトリガンとレッドトルネードが侵入したが、試作品の人類抹殺ロボットと対決となった。しかし、タイフーンマンズのパワーである為、退陣した。

ジャスティスリーグ達もやってきた。

バットマンは、タイフーンマンズに言った。

「台風の力に擾乱を更に注げば、無限の力が出来る。とくれば我々もパワーアップできるかもしれない。」

アウトファイヤーは、一つ思いだした。

「エトリガン、煉獄には確かもう一人ヒーローがいたな。」

「デイベイドのことか。彼の力は、煉獄の法律のパワーで無限の能力が出せる。」

デザートリングは、指を鳴らした。

「それだ、俺達の秘策という物を作ることと誠を倒せないかな？」

うまくいくかは、分からないが不可能ではない。

「チェックメイト！」

「レッドトルネード、俺がよそ見たとたんに。」

「不覚を狙えと、バットマンに教えられてね。」

エトリガンは、納得していた。

第八話 幡花々レッドトルネードの悩み（後書き）

次回、第九話 色彩闇黒々誠の地獄作戦が次第に始まりに行く。
お楽しみに

第九話 色彩闇黒〜誠の地獄作戦が次第に始まりに行く〜（前書き）

超危険な戦いの幕が起こる寸前に誠のリーダーがいなくなる。

第九話 色彩闇黒、誠の地獄作戦が次第に始まりに行く

数々の危険が迫ってきていた。

タイフーンマンズは、擾乱の力を上げていた。

海水の中でパワーを上げていた。

アクアマンは、タイフーンマンズのパワーアップに疑問があつた。

「台風が水蒸気を吸い取ってせいちょうのは知っているが、海水温が若干冷えたのは、タイフーンマンズの力なのかな？」

アクアマンは、そういいながらも岩を砕いて自らのパワーを上げていた。

アイスハンドマンはジョン・ジョーンズと一緒に火星にきた。

「此処は、今は静かだ。火星は地球よりも寒いから修業には打って付けだろう。」

「ありがとうございます。ジョン！」

寒い空気をアイスハンドマンは利用していた。

いろんなところで修業をしているヒーロー達。

誠のリーダーは、歩いている最中、何者かにさらわれた。

「お前のせいで、ジャスティスリーグをやめさせられたんだよ！」

フラッシュが誠のリーダーをさらった。一体、何をするつもりなんだろうか？

第九話 色彩闇黒〜誠の地獄作戦が次第に始まりに行く〜（後書き）

次回、第十話 音切〜誠の厄払い〜。お楽しみに

第十話 音切く誠の厄払いく（前書き）

誠の総攻撃が、始動する。

第十話 音切、誠の厄払い

「お前のせいで、ジャスティスリーグから追い出されたんだよ。」

「すごいことじゃないか、おめでとう。」

「貴様ー！」

フラッシュは、誠の一人を殴った。

フラッシュは、その後、再び姿を消した。

タイフーンマンズ達は、誠の邪悪軍団が出てくると同時に行動開始の準備を万全に整えた。

「クリパードは、緊張して瞑想はできるのか？」

「心配ない、瞑想によるパワーを5倍に引き上げたからな。」

誠は、邪悪軍団を100体も繰り出した。

タイフーンマンズは、擾乱の鎧を纏った。

ニュージエネレーションジャスティスリーグとジャスティスリーグは、この謎の誠の真実に迫り始める為、慟哭の如く強い戦いが始まる。

「アイスハンドマン、良い作戦はないのかい？」

「今、模索している。」

第十話 音切〜誠の厄払い〜（後書き）

次回、第十一話 欲感覚〜ヒーロー達の進化〜。お楽しみに

第十一話 欲感覚〜ヒーロー達の進化〜

模索を開始しているアイスハンドマンは、邪悪なロボットを任す作戦を考えていた。

「凍らせていけば、大丈夫かな？」

アイスハンドマンは、ロボット1体の上半身を凍らせた。

しかし、ロボットは其れを破壊してしまった。

「くそっ、だめか。」

一方、タイフーンマンズの一人である風は、ロボット1体をやっとな破壊した。

「台風が息切れなんて情けないね。」

ホークマンが苦笑いしながら言った。

「お前だってロボットに吹き飛ばされていたじゃないか！」

ホークマンは、ちょっと反論されて言葉が出なかった。

スーパーマンは、ロボット16体と対決していた。

雷も応戦した。

「結構こいつら強い・・・」

「だが、二人の力で吹き飛ばしてやる。」

ロボット16体は、吹き飛ばされて粉々に砕けた。

スーパーマンと雷の力は、絶大であった。

バットマンとフスリヴィットとグリーンアローは、3体のロボットを見た。

「3体のロボットの気を弱めるためには、俺の進化した弓矢だぜ。」

グリーンアローは、弓矢を放った。

ロボット3体は、矢が刺さり、動きが鈍くなった。

バットマンは、バッタランでロボットの神経と言える場所をこじ開けた。

フスリヴィットは、自分の出番がなかったことに悔しがっていた。

バットマンの凄さは、ロボットの形をすぐに知り、電源のコードを切断したのである。

「さすがは、バットマンだな。」

フスリヴィットは納得していた。

誠は、兎に角焦っていた。

「早くしろ、最終兵器はヒーロー達を皆殺しするにぴったりなぐらいにしないと。」

「リーダー殿！大変です。」

誠の部下が、リーダーにまずいことを言った。

「フラッシュが、誠の一人に化けただと。しかもこの場所から半径200メートルで！おいつ、手の空いている奴等は、フラッシュを見つけ次第射殺しろ！」

「了解！」

第十一話 欲感覚〜ヒーロー達の進化〜（後書き）

次回、第十二話 香焦〜闘いの攻めとフラッシュの危機〜。お楽しみに

第十二話 香焦く闘いの攻めとフラッシュの危機く（前書き）

もうすぐseason5が来ます。

第十二話 香焦く闘いの攻めとフラッシュの危機く

フラッシュを見つげに誠の軍団の80人がやってきた。

タイフーンマンズとホークマンは、最後の一体を倒した。

「これで、最後だな。」

「しかし、かなり疲れたな。」

ヒーロー達は、相当な疲労感がたまっていた。

デザートリングは、突然震度4の地震を引き起こした。

「どうした！デザートリング？」

「誠の奴等がこっちに来るぞ！」

スーパーマンとバットマンとグリーンランタンとストックウィングとワラットマンとアウトファイヤーは、誠を食い止めるために残った。

タイフーンマンズ達は、誠のアジトに遠回りで回った。

「此処だな。」

アイスハンドマンとクリパードは、誰か来ることを警戒した。

「誰だっ！」

フラッシュがやってきたのである。

「お前、なんで此処にいるんだよ。」

「俺は、誠に復讐する。」

一方、スーパーマン達は……

「誠の軍団は何を企んでいるのか聞いているんだ!」

グリーンランタンは激昂しながら質問をした。

「だから、最終兵器が貴様ら全員皆殺しになるんだよ。ハハハハハハ!」

グリーンランタンは、緑色のビームを拳に変えて、誠の者を殴った。

「急いで、タイフーンマンズのところに行くぞ!」

「了解っ!」

誠のアジトに入り込んだタイフーンマンズ達は、誠の軍団を懲らしめながらある物を見ていた。

「最終兵器が、現れてしまった。」

タイフーンマンズ達に迫りくる危機そして、フラッシュは何を考えているのか?

次回に続く・
・
・
・

第十二話 香焦く闘いの攻めとフラッシュの危機く（後書き）

次回、第十三話 背水く追い込まれるヒーローく。お楽しみに

第十三話 背水ゝ追い込まれたヒーロー（前書き）

タイフーンマンズ達の最大の危機到来。フラッシュが・・・

第十三話 背水く追い込まれたヒーロー

スーパーマンは、その最終兵器を見て少しだけ震えた。

「何だ、あのデカ物は？」

誠のリーダーが言った。

「これこそ、ヒーロー抹殺最終兵器だ！ハハハハハハ」

タイフーンマンズは、雲を合体させて巨大な拳にして抹殺装置を破壊しようとしたが、抹殺装置は、雲の拳を打ち砕いた。

「こいつ、まずい相手じゃないのか？」

グリーンアローとブルービートルのタッグ技もやったが、抹殺装置はそれも破った。

ヒーロー抹殺装置は、グリーンランタンとホークマンとフスリヴィトとストックウィングを吹き飛ばした。

オマツクも攻撃をするがまるで歯が立たない。

「ブラザーアイ、攻撃態勢がこれでもあわない。」

「困りました、色々試しているのですが・・・」

アイスハンドマンは、冷凍光線でヒーロー抹殺装置を凍らせようとしたのだが、逆にエネルギーになって、10階建てビルを凍らせて

しまった。

「何だよこいつ。ビクともしないなんてウワァー!」

抹殺装置に吹き飛ばされてしまったアイスハンドマン。

タイフーンマンズとクリパード達も攻撃をするが、どうしても吹き飛ばされてしまう。

こいつを倒す方法があるのならそれに賭けようと考えているタイフーンマンズ達は、抹殺装置に攻撃を受けそうになった。

フラッシュが突如現れて、抹殺兵器の周りを回転して竜巻を作り出した。

抹殺装置を空中高く舞い上がった。

「お前、フラッシュじゃねえのか？」

フラッシュは、みんなに謝りたいと言おうした瞬間、故障した抹殺装置がフラッシュめがけて落下した。

フラッシュの左手が飛び、みんなは衝撃を受けた。

抹殺装置の中には、もう一体の抹殺装置が入っていた。

「こいつを倒して、フラッシュを助けるぞ!」

「おー!」

第十三話 背水ゝ追い込まれたヒーロー（後書き）

次回 season 4 最終話 霧裂涙壁ゝフラッシュよ永遠にゝ。
お楽しみに

s e a s o n 4 最終回 霧裂涙壁 フラッシュよ永遠に (前書き)

涙の別れそして決断。

season 4 最終回 霧裂涙壁 フラッシュよ永遠に

フラッシュを助けるために、ヒーロー達はフルパワー状態となった。

「あの機械を破壊してくれる！」

「俺たちの友情は、お前なんかには通用しない。だが、誠に作られた兵器であろうが俺達はそれを超える力があるんだ！」

誠のリーダーが言った。

「お前等の力なんか最終兵器で全部破壊してくれる。殺れー！」

最終兵器は、誠のリーダーの命令に従い攻撃をしようとしていた。

タイフーンマンズが、擾乱パワーを限界5つまりカテゴリ5にしたことにより、最終兵器の身動きをとれなくした。

そして、最終兵器は、スーパーマン達の拳で吹き飛ばされた。

それをグリーンランタン隊がビームで囲み、太陽にぶつけて爆破させた。

誠のリーダーは、逃げ去ってしまった。

アイスハンドマンは、フラッシュを見に行った。

フラッシュのスピードフォースはかなり破けていた。

フラッシュは吐血した後、ある言葉を言った。

「ニュージェネレーションジャスティスリーグのみんなとジャスティスリーグのみんなよ。誠の行動を俺の仇だと思って解散させてほしい。」

そう言ったフラッシュは息を引き取った。

フラッシュの死は、いろんなヒーロー達にとってもつらく悲しい出来事となった。

スピードフォースは、ジャスティスリーグの基地内で大切に保管された。

「三代目フラッシュのご冥福をお祈りしようじゃないか。」

デザートリングがそう言った。

ヒーロー達は、フラッシュのために誠の軍団を解散させて全員を刑務所域にすることを決意した。

誠のメンバーは、残り4名だけになっている。

タイフーンマンズの誠との最後の闘いが遂に幕を開ける。

season5と劇場小説版決定。

タイフーンマンズ劇場小説版?!

タイフーンマンズが行方不明に、アイスハンドマンとデザートリン

グ達のニュージェネレーションジャスティスリーグの活躍に致命傷が生じる。

season 4 最終回 霧裂涙壁〜フラッシュよ永遠に〜（後書き）

次回 season 5 第一話 悪咄〜ジョーカーのいやらしい
作戦〜。お楽しみに

s e a s o n 5 第一話 悪嘴くジョーカーのいやらしい作戦く（前書き）

s e a s o n 5 到来なんです、 s e a s o n 5 は、 8 話までしか
ありません。

season 5 第一話 悪魔くジョーカーのいやらしい作戦く

ハリードマンは、鉄くずを火であぶって溶かしながらまったく新しい金属を作っていた。

「ヒーローは、平和を願うのが一番だが、こうやってちょっと新しい武器を作るのもいいかな。」

アイスハンドマンとストックウイングは、その武器を基地の外側に取り付けていた。

それは、今後地球にエイリアンの侵略がないように威嚇射撃用の武器を取りつけたのである。

バットマンやスーパーマンもそれに参加している。

一方、地球では……

ジョーカーが再び悪さをし始めていた。

「誠の野郎どもに、悪の天才が務まるかっていうんだよ！」

ジョーカーの乗っているバイクには、ミサイルを6発連続に発砲できるシステムや四方八方にいる敵をロックオン出来る装置や、一気に時速255?まで飛ばせるスピード加速装置が搭載されていた。

どうやら、ペンギンとリドラーも一緒にいた。

「ジョーカーの奴、すごいバイクを持っているな。」

「ペンギン、お前の傘も最近改造したって言ったがどんなものなのか見てみたいな。」

「まあ、そのうち見せるって!」

タイフーンマンズとデザートリングとアウトファイヤーは、その三人の悪人をストーカーのように追いかけていた。

ジョーカー達がやってきたのは、大型銀行である。

ただし、金を盗みに来たわけではない。

ある特殊な物質を持つ宝石が此の大型銀行にあることを知ってやってきたのである。

ペンギンは、傘の新たな攻撃力を発揮させた。

「よしっ、うまくいってくれよ。」

傘の羽根や骨組みが変形して、槍になった。

リドラーは、其れを見て笑っていた。

「そんなものでどうやって建物に穴を開けるつもりなんだ? ハハハハハハハ。」

「見ている! オリヤー!」

ドスッと壁に刺さった傘は、槍から傘に変形して傘が地面に落ちる

と壁がきれいな円形になってぐずれる仕組みになっていた。

穴の直径は2 m 1 0センチメートルである。

彼等は、近くにヒーローが来ていることを知らずにして銀行を襲い始めようとしていた。

s e a s o n 5 第一話 悪嘴くジョーカーのいやらしい作戦く（後書き）

次回 第二話 無難く悪党は引つ込め！く。 お楽しみに

第二話 無難く悪党は引っ込めー（前書き）

ジョーカーのハプニングが悪党たちを御用にした。

第二話 無難く悪党は引っ込めー

ヒーローの存在を忘れていた悪党たちは、銀行の中に入っていた。

「リドラー、さっきから俺たちの背後に気配を感じるが・・・」

「ヒーローのような気配があるな。俺に任せろ！」

リドラーは、背後に振り向いたが誰もいなかった。

「あれ、さっきまでいたのに？」

「おいっお前等、さっさと行くぞ。」

ジョーカー達は、外にヒーローがいるとは知らなかった。

「こいつ等、いつの間に！」

タイフーンマンズは、特殊の石を見つけた。

「此の鉱石は、お金の守り神と呼ばれている宝石じゃないか！」

デザートリングは、震度3の地震を悪党に浴びせた、

「んなつ、地震を起こすとは！」

アウトファイヤーは、ロープでリドラーを捕まえた。

「くそっ、捕まっちゃった！」

タイフーンマンズは、ペンギンの傘に攻撃を受けたが、雲の姿になっているので無難である。

「そうだった。タイフーンマンズ共に攻撃が通用しなかったんだ！」

「今頃気がついても、遅いっ！」

ペンギンは、タイフーンマンズの雲の拳に殴られて悶絶した。

ジョーカーは、デザートリングを攻撃しようとしたが身体に震度4の攻撃を受けて、気絶した。

其の戦いをこっそりとみている一人の姿がいた。

ジョーカー達は、警察に捕まった。

「本当に最近のヒーロー達は、洞察力もパワーも桁外れだな。」

バットマンは、タイフーンマンズの風にそう言った。

「ああ、これからもこんなヒーローが増えると思うよ。」

「そうだな！」

第二話 無難く悪党は引っ込めー（後書き）

次回 第三話 紐喝く衝撃のニューヒーローー。お楽しみに

第三話 紐喝く衝撃のニューヒーローく（前書き）

前回にこっそりと闘いを覗き見していた人物です。

第三話 紐喝く衝撃のニューヒーロー

バットマンは、謎の紐を見つけた。

「何だろうこれは？」

ハリードマンとアイスハンドマンとワットマンとグリーンランタンとグリーンアローとレッドトルネードは、クレイフェイスと戦っていた。

「お前等をあの世に送った後、誠の者たちに見せてやる！」

ハリードマンは、タイフーンマンズ達を呼び出した。

「クレイフェイスか、こいつはとんだ相手だな。」

風とアイスハンドマンは、氷の盾でクレイフェイスの攻撃をガードしていた。

「これは、いくら新世代ヒーローでも悪戦苦闘気味だぜ。」

ハリードマンは、炎攻撃でクレイフェイスの体を固めようとするものの失敗してしまう。

バットマンとフスリヴィットは、クレイフェイスに投げ飛ばされてビルの壁に貼り付けされた。

「くそ、USBケーブルを使って電気を送ってやる！」

「そんなことができるのか？」

「俺のUSBケーブルには、電流が流れる仕組みになっている。だから、近くに電線があれば威力が増すけど停電というデメリットもある。」

しかし、フスリヴィットのUSBケーブルでは、クレイフェイスのべとべとに負けてしまい、逆にフスリヴィットが感電してしまった。

「大丈夫か？」

地面に降り立ったバットマンとフスリヴィットの前に紐のようなものが多数張り巡らされた。

「これは・・・」

バットマンは知っている。

「私は、アスカリス。最高の紐使いのヒーローだ！」

ニューヒーローであるアスカリスは、いろんな紐や何もないところから紐を出すことができるスーパーヒーローである。

一人称は、私だが男性である。

「クレイフェイスに対抗できる紐よ出てきなさい！」

セラミックのように頑丈な紐がビルとビルの間から現れて、クレイフェイスをぐるぐる巻きにした。

タイフーンマンズは、驚いていた。

そして夜明け頃、タイフーンマンズはアスカリスをニュージエネリーションジャスティスリーグの仲間入りをさせようとスカウトした結果、どうやら応じてくれたようである。

最高の新戦力になる可能性が高くなってきた。

第三話 紐喝ゝ衝撃のニューヒーローゝ（後書き）

次回 第四話 進化異常ゝ実験失敗で誕生した生物ゝ。お楽しみに

第四話 進化異常、実験失敗で誕生した生物（前書き）

とある実験が失敗した。そこには誠の影が・・・

第四話 進化異常、実験失敗で誕生した生物

とあるアメリカの生物研究所。ここではある生物の耐久実験を行っていた。

「ゴキブリを縮小する実験がうまくいけば、凄いことになるぞ！」

しかしこの研究機関の中に、誠の人物が紛れ込んでいることが分かった。

実験は、失敗に終わってしまった。

タイフーンマンズとスーパーマンは、大きなゴキブリと戦っていた。

「でかすぎる……」

そのゴキブリは、10階建てのビルとほぼ同じ大きさであった。

「二足歩行という倒し方がまずいことになる。」

タイフーンマンズは作戦を考えていた。

スーパーマンは、援軍を呼びに行くためにジャスティスリーグ本部に戻った。

「援軍が来るまでは、人のいないところまでこのゴキブリを引き寄せるぞ。」

雨と波は右手を雲に変えてゴキブリをからかった。

ゴキブリは、怒りながらタイフーンマンズのほうにやってきた。
スーパーマンは、グリーンランタンとアスカリスを呼んできた。

第四話 進化異常、実験失敗で誕生した生物（後書き）

次回 第五話 蟲断、手がかり。お楽しみに

第五話 蟲断ゝ手がかりゝ

アスカリスは、ゴキブリを見ていた。

「なんだありゃ、でかいゴキブリか。」

スーパーマンとタイフーンマンズは、ゴキブリの向かっている方向から遠ざけようと攻撃を開始した。

このゴキブリは、攻撃を受けるうちにどんどん小さくなっていた。

アスカリスは、ゴキブリを糸でくるんで丸くした。

「いっちょあがり！グリーンランタン後は頼むぞ。」

「分かった。」

グリーンランタンは、ゴキブリをジャスティスリーグの基地に運んだ。

バットマンは、そのゴキブリに興味を持っていた。

「これを調べて、何か見つかるのかバットマン？」

「誠との最後の決戦を見つけれるヒントになるかもしれないからな。」

バットマンは何かを探していたら、ゴキブリから重大なヒントを見つけた。

「これは、ボスの弱点。」

バットマンは、タイフーンマンズに通信をした。

「何か分かったバットマン？」

「リーダーは、人間の姿ではない、むしろエイリアンと人間のハーフということになる。」

「そいつの弱点は？」

「湿度の高い場所だ。どうやらタイフーンマンズとは、構造が違う。気を付けないとタイフーンマンズ達の弱点である湿度9・9パーセント以下の場所だということだ。」

「ということは、湿度にも邪魔されないタイフーンマンズ以外で行動するのもいいかもな。」

タイフーンマンズは、良い考えがあるようだ。

第五話 蟲断ゝ手がかりゝ（後書き）

次回 第六話 最終決戦 part 1。お楽しみ

第六話 最終決戦 part 1 (前書き)

誠との最後の決戦が幕を開ける。闘いの感動は素晴らしいものである。

第六話 最終決戦 part 1

クリパードは、誠対策会議を行った。

「それでは、此処にニュージェネレーションジャスティスリーグ＆ジャスティスリーグ最悪犯罪組織誠打倒会議を行う。」

タイフーンマンズは、アウトファイアーにチーム表を出した。

「誠のリーダーを倒すするチームは、タイフーンマンズ、パットマン、グリーンアロー、フスリヴィト、レッドトルネードである。仲間を倒すチームは、スーパーマンが率いるそれ以外の者たちだ。」

計画を確実に積み重ね無事に作戦会議も終了した。

遂に誠との最終決戦と思いきや……

「エトリガン！来るとは思っていたぜ。」

「タイフーンマンズ、良いことがある。誠の奴等どうやら我々の総攻撃に気が付いていない。」

誠の基地には、アスカリスが覗いていた。

「いつでも、攻撃が可能だ。」

雷は、右腕を雲に変えて、一気に雲を拳にして、誠の基地を破壊した。

「あのくそ、正義どもがかかれ！」

フスリヴィトは、誠の仲間をぐるぐる巻きにして5・54ボルトの電流を流してしびれさせた。

「俺の電流の味はいかが？」

誠の今のリーダー、マックス・キリングは、水蒸気が嫌いである。

「くそ、俺にはこれがある。」

「風、あいつは水無石を飲み込もうとしているぞ！」

「なにっ！」

「もう遅いぞ！ハハハハハハ」

マックス・キリングは水無石を喰った途端、地球上の水蒸気が吸い込まれ始めていた。

「人間も動物も植物も台風もみんな水分がある。それを吸いつくせばこの地球を破壊することもできる。」

タイフーンマンズ達にとって最大の闘いになってしまっ此の最終決戦今後の展開から瞬きができないぞ！

次回に続く

s o u n d t r u c k 集

ヒーローになった人間の脅威

ケーブルの使い手

正義の炎よ永久に燃え続け！

両手の鋼

バイカル湖からの奇跡のヒーロー

地震よ悪を挫け！

天狗のヒーロー

炎ではなく素早さで

糸を手繰り寄せて

仏教衝動英雄劇

第六話 最終決戦 part 1（後書き）

次回 第七話 最終決戦 part 2。お楽しみに！

第七話 最終決戦 part 2 (前書き)

三話完結型にして、本当の完結。タイフーンマンズ達の最強なる戦いが始まる。

第七話 最終決戦 part 2

タイフーンマンズ達は、これまでにない圧迫感に襲われていた。

「このままでは、地球が壊れてしまう。」

マックス・キリングは、こう言いながら嘲笑った。

「貴様等の行動もここでおしまいだ！グワハハハハハハ」

クリパードは、千手観音の手で倒そうとしたが攻撃が塞がれてしまった。

「ダメか。」

スーパーマンやタイフーンマンズの攻撃も彼には届かない。

水蒸気を吸いこむ水無石には限度があった。

マックス・キリングは、身体全体が水無石になっているが地球を壊滅に追い込めるほどのパワーは、持っていない。

タイフーンマンズは、其れを思い出した。

「地球上の水蒸気は消えることはない。水無石は一度吸い込んだ水分を蒸発させる。そして水無石が割れたと同時に水無石はただの石になる。」

「そこまで待てば彼は・・・」

「石になるが、生きている石となって特性刑務所行きだからな。」

第七話 最終決戦 part 2（後書き）

次回 最終回 最終決戦 part 3。お楽しみに

最終回 最終決戦 part 3 (前書き)

最終回突入！

最終回 最終決戦 part 3

石になりかけているマックス・キリリングは、少し苦しみが出ながらもヒーロー達を苦しめていた。

タイフーンマンズ的能力はマックス・キリリングにはまだ効かなかった。

なぜなら、水無石の効果は少しだけあるのだ。

「まだ効果が切れないのか？」

「水無石を大量に取り込むとやはり身体が崩れていくのか。」

マックス・キリリングの水無石の効果が遂に切れた。

タイフーンマンズ達の攻撃が、水無石をたたき割りマックス・キリリングを外に出した。

バットマンとフスリヴィットがロープでキリリングの身柄を拘束することに成功した。

マックス・キリリングは、普通の刑務所に入れられた。

タイフーンマンズ達は、ヒーロー達の宴会を開いた。

「グリーンランタン、そのハンバーグ取ってくれないか。」

「良いぜ。」

タイフーンマンズ達は、長き戦いで疲れたスーパーパワーを癒していた。

12月3日！タイフーンマンズがパワーアップして帰ってくる！

タイフーンマンズエヴァリューション

ヒーロー達に進化と新世紀がやってくる。

最終回 最終決戦 part 3 (後書き)

次回作に期待してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2399i/>

タイフーンマンズ～ジャスティスリーグへの道筋(みち)～

2011年1月5日03時24分発行